

---

# 日本 はじめました（改訂版）

たこわさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日本 はじめました（改訂版）

### 【Nコード】

N8581U

### 【作者名】

たこわさ

### 【あらすじ】

僕の家近くにはシルバー農園があった……。始まりはおじいちゃん二人、おばあちゃん一人と一緒に。これは、古代日本にタイムスリップし「クニ」となった主人公が、いろいろな経験を積みながら歴史を変えていく物語である。ほのぼのした国家運営ものを目指して。

ときどきイメージ写真があります。ご注意ください。

## 一章 一話 はじまりの日（前書き）

たこわさといえます。よろしく願います。

感想・指摘お待ちしております。

この小説では登場人物の多くが方言（主に福岡地方）を話します。方言が間違っている、意味がわからない、括弧の翻訳が邪魔、などご意見をいただければ参考にしたいと思います。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・国家・思想等また本家様とはなんの関係もありません。ご了承ください。

## 一章 一話 はじまりの日

それは、ちょうど梅雨入り宣言がＴＶを賑わす、初夏のこと……。

僕が生まれ育った家のすぐ近くには、「シルバー農園」と看板のかかった畑があった。定年退職した高齢者が老後を楽しく過ごすために取り分けられた、公民館の隣の小さな畑だ。

もつとも、そんな事情を知ったのは大人になってからで、子供のころの僕にとってシルバー農園は、おじいちゃん・おばあちゃんたちに可愛がってもらえる場所だった。僕はシルバー農園に行くのが大好きだったし、両親もそれを認めてくれていた。後から聞いた話では、両親は心配しつつも良い経験になると考えてくれていたようだ。

そういう訳で、僕は暇さえあれば畑に通う少し変な子になった。鍬を振るおじいちゃんを眺めたり、お茶を飲みつつ話をしたり、畑の端にどろ団子を並べたり、お菓子をもらったりしていたのをよく覚えている。もう少し大きくなると、自分も畑仕事を手伝うようになった。今考えると、おぼつかない足取りで鍬を振り上げる子供な

んで、何の役にも立たなかったのだろうけど、みんなから褒められて、誇らしい気持ちになったものだった。

そんなこんなで、僕と農園の関係はずっと切れないままに、僕は学生服を着る年齢になり、働く年齢になっていた。農園に来るおじいちゃんたちもずいぶんと入れ替わった。しかたのないことだとかっていても、何度も涙で目を腫らしてお別れをした。

悲しいこともあって、でもそれを含めて本当にたくさんの経験と優しさをくれるシルーバー農園。子供のころとは色々なことが変わり、僕が顔を出せるのは仕事の合間を縫った僅かな時間になって、それでも僕と農園の繋がりは変わらなかった。大人になるにつれてたくさんを知って、権利と義務がいくつも増えても、いやだからこそ、僕にとって農園で過ごす時間は大切でかけがえのないものだった。

梅雨に入ったのが嘘のように、空は澄み切っていて太陽がジリジリと肌を焼いてくる。僕は一仕事終えて、畑の横の公民館で涼んでいた。隣では一緒に作業をしていた佐々木さんと稲じいちゃんが、畳に身を任せてくつろいでいる。汗をかいた後の心地よい疲労感を感じていたそんな昼下がり。さて麦茶を飲もうかと体を起こして、

ふと違和感を感じた。一瞬だけ立ちくらみを起こしたような、目の前にシャボンのまくが現れてはじけたような、不思議な感覚だ。この暑さで、思ったより疲れたのかもしれない。そんなことを考えていると、ちょうどいい具合に冷たい風が入ってきて、火照った体を癒してくれた。

「久ちゃんおつとーねー？　ちょお来てみい」（久ちゃんいる？　ちよつとおいで）

氷でキンキンに冷えた麦茶を一気飲みしていると、外からさつちやんの声がした。ばあちゃんがご指名ばい、なんて軽口を稲じいちやんと叩きながらつつかけを履いて玄関をくぐる。そこにはムツとした熱気と照りつける日差しが……あるはずが、さわやかな風に熱気がさらわれたのか、公民館の中よりもよほど涼しい、程よい温度でなんだか拍子抜けだ。

「外のほうが気持ちいいごたーよー！」（外のほうが気持ちいいよ）

まだ部屋の中にいる佐々木さんたちに一声かけてから周りを見回す。さて、さつちゃんはどこだろう。

「こつちさおいで。珍しかもん見れるばい」（こつちにおいで。珍しいものがみれるよ）

僕の声が聞こえたのか、本格的に探すまでもなくさっちゃんが一歩声をかけてくれた。ちょうど公民館を出て左手の死角にっているあたりだ。そちらのほうに歩いていくとさっちゃんはこつちに手招きをしながら、道の向かいの田んぼを指差していて……その先を目で追った僕は言葉を失った。

最近苗の植わった田んぼが一つと、コンクリート固めの用水路一つを挟んだところ。そこにある田んぼのなかばあたりを境目に、見渡す限りの森が広がっていた。

「さつきすつと涼しくなりんしゃったでしょう。それからずっと見るとよ。ほら久ちゃんもよう見とかんと、いつ消えるかわからんよ」

驚きすぎて息を吸ったまま固まった僕の耳に、蜃気楼なんて見たことなかるうなんて声が届く。ああそうかこれは蜃気楼か、蜃気楼ね。蜃気楼なら仕方ないね……。

ああもう、さっちゃんも八十を超えてさすがに目が悪くなったのか、それとも僕の目がおかしいのか。さすがに田んぼ一つはさんだくらいの距離くらい見通せるというか、明らかに蜃気楼とか言うには質量感がありすぎるというか。

……………さっちゃん、あの森、何度見ても本物に見えるんだけど。





## 一章 一話 はじまりの日（後書き）

川口咲江（81）

さっちゃん。

主人公が物心ついたころから知っているおばあちゃん。

歳の近いおばあちゃんたちからさっちゃんと呼ばれていたので、子供時代の主人公もそれを真似た（田舎ではよくあること）。今さら川口さんとか違和感がありすぎて呼べない。

子供好きで、主人公が成人した今でも本当の孫のように気にかけている。

## 二話 はじまりの日

……さっちゃん、あの森、本物に見えるんだけど。

見間違いかと儚い希望に賭けて目をこすってみる。もう一度見上げた先にはやはり、幻影でもなんでもなく本物の大木が、まるで初めからそこにあつたようにずっしりと据わっていて、その奥には見通せないほど遠くまで続く森……いやまるで樹海のような大森林が広がっていた。

「稲じいちゃん！？ ちょっと あれっ」

後ろから近づいてくる人影に話しかけようとしても、混乱してうまく言葉が出ない。振り向いた先では、佐々木さんも稲じいちゃんも田んぼの先を見て啞然としていた。常識的な反応に少しほっとしてしまう。というか、さっちゃんが天然なのを忘れていた。

「とりあえず、あのへん調べてくるけん」

少し冷静さをとりもどして、僕が最初にすべきだと思ったのは目の前の森の確認だった。とりあえずそんなに距離があるわけじゃない。田んぼの間をあぜ道を通って、用水路の上まで来ると、田んぼと森の境目がずっとはっきりする。

ほとんど期待してはいなかったけど、近くで見るとなおさら森はリアルだった。田んぼはなかばで完全に無くなっていて、代わりに落ち葉が積み重なった地面になっている。それが幻でないのを証明するように、田んぼから森のほうに少しずつ水が染み出している。森の奥を覗いてみると、遠目に見たときと同じく切れ目など期待できそうにないほど延々と緑色の世界が広がっていた。雑木林みたいな緑ではなくて……屋久杉がたくさん生えているような……そう、ちょうどジブリ映画のもののけ姫に出てきたような神秘的な光景だ。

あ、鳥が飛んでる。

どれほどそうして眺めていただろう。体感的にはずいぶんと長い間呆けていた気がしたけれど、振り返って公民館のほうを見てみると、さっちゃんたちの立ち位置がほとんどかわっていなかった。どうやら、時間的にはたいしたことなかったらしい。そうして、またあぜ道を戻ろうとして、今日何度目になるかわからない驚きの声が出た。

今まで目の前の森にしか意識がいていなかったけど、考えてみれば可能性はあったのだ。振り向いた僕の視界のなかで、公民館前を通過して大通りにつながる道が、ぷつぷつ切れてなくなっていた。

その後確認してみると、公民館前の道路はどちらの端もぷつと切れていて、その向こうには延々とあの森が続いていた。公民館の玄関側、道路から右に曲がって裏山を通る小道も結果は同じ。どの方向も大体公民館から同じくらいの距離をとって、ふいに森になってしまっていた。公民館から小山を挟んだ向かいの僕の家も、あと少しというところで森に飲まれてしまっている。公民館備品の地図の上に線を引いてみると一目瞭然だった。まるで円を描くように一部の土地が取り残されて、その周りが全部森になってしまっている。

その円の中心は、公民館だった。

とりあえず公民館周りの調査と分析が片付いたところ、太陽は大分西に傾いていた。

「十五少年漂流記みたかねえ」（十五少年漂流記みたいだねえ）

お茶を飲みながら、さっちゃんがぼそつとつぶやいた。現状がわかるにつれて暗くなっていた部屋の空気が少し和らぐ。わざとなんだっただけなのに、たぶん天然なんだろうなあ。さっちゃんだし。

「歳を考ええ、歳を。だいたい久坊はようついでこんかろう」

「いやいや、さすがに知つとるよ。現代っ子は本を読まないとか偏見やけんね」

せつかく変わった空気に稲じいちゃんと僕がのっかった。佐々木

さんは会話にこそ入ってこないけど、向こうで思いっきり笑っている。口数は多くないけどノリはいい人なのだ。

一通り笑って場が明るくなったところで、ああそうそうと、さっちゃんが切り出した。

「今日久ちゃんひさちゃんが来るち聞いて、おこわ炊いてきたとよ。明日まではようもたんけ、ここで食べんね」（明日までは持ちそうにないから、ここで食べませんか）

そう言って、風呂敷で包んだ土鍋を持ってくる。さっちゃんのおこわは本格的で、僕が小さいころからの大好物なのだ。それをわざわざ持ってきてくれたらしい。

「本当に！？ 嬉しいなあ」

思わず口元がにやけて、笑われてしまった。でも、僕の好物が食べれるのは横に置いて、まともなご飯が食べられるのは嬉しい。正直、まだ青い野菜をかじる羽目になるかと思っていたけど、とりあえず今晚はまだ避けられそうだ。

「じゃ、わしが水汲んできましょ」

玄関に近かった佐々木さんがそう言って立ち上がった。僕が行きますよと腰を上げるけど、ええから休んどきなさい、とやんわり断られてしまう。ちなみに佐々木さんが行ったのは、裏庭の湧き水のところだ。昔から水が枯れないことで有名な泉で、今はコンクリートで周りを固めてプールのようになっている。広いお風呂くらいの大きさの水槽がいくつか並んでいて、湧き出し口に近いところから順番に水がたまっていく。そして最後に用水路を通って田んぼに流

れ込むという塩梅だ。ご先祖様たちの感謝の気持ちか、奥には小さな祠があった。とはいえ今では夏に涼をとる格好のスポットだ。上には藤棚があつて、こんな田舎にはもったいないくらい豪華な休憩所になっている。いや田舎だからこそなのかもしれないけれど。

それはともかく、森に切り取られてしまったのは道路だけでなかったのか、蛇口をひねっても水が出ないし、スイッチを入れても電気がつかない（森との境目で電線が綺麗に切れて垂れ下がっていた。水道も似たようなものだろう）今、変わらず水を出してくれる裏の泉は僕たちの生命線だ。

ああそうだ、僕はお箸とお茶碗を取ってこよう。

> i 2 9 1 9 0 — 3 7 6 0 <

## 二話 はじまりの日（後書き）

稲富 太郎（76）

稲じいちゃん。

主人公のご近所さんで、小さいころからよく面倒をみてもらっていた。

農園で会ったのではなく、主人公に誘われて農園に入った。

色々教わったり頼りにしたりはしているけど、日ごろの関係は悪友のそれ。主人公が昔、ヘリコプターの本当の名前はヘコリプターなんだと信じていたのはだいたいこの人のせい。

### 三話 はじまりの日

「じゃ、わしが水汲んできましょ」

佐々木さんがそういつて立ち上がった……。

全員分の食器を取りに行ったのはいいけれど、よく使うコップはともかくその他の食器は埃をかぶっていたので、結局僕も洗い物に行くことになった。というか、手を洗いに結局全員が湧き水のお世話になった。こうしてちよつと手間がかかるだけで、日ごろ意識せずに使っていた水道のありがたみが身にしみてくる。

そうこうしている間に、今晚のご飯が行き渡った。と言っても、おこわをお茶碗によそおって、コップに湧き水をくんだだけの質素なものだ。もちろんそんなことを言っていられる状況ではないし、むしろとてもありがたいことだとは思うけども。

「さっちゃん、僕のだけご飯多かよ」

問題は、明らかに僕のお茶碗だけご飯がたくさんつがれていることだ。

「なん言つとうとね。食べ盛りにはちゃんと食べんと、よう持たんばい？」



「つたく、一丁前に遠慮なんぞしてからに。ハゲるぞ」

稲じいちゃんにばしんと背中を叩かれる。食べ盛りはもうそろそろ過ぎたんじゃないかとか、そんなことで禿げてたまるかとか、色々言いたいこともあるけど、ぐつと飲み込んで心遣いに甘えることにした。

「じゃあ、いただきます」

「川口さんありがとう」

「はい、いただいでください」

久しぶりのさっちゃんのおこわを食べる。香ばしい醤油と新鮮な<sup>たけのこ</sup>筍の風味、それに鶏肉がいい味を出していて本当に美味しい。

なぜかふっと、机の向かいに両親を思い浮かべてしまった。つんと鼻にこみ上げてくるものがあつて、急いで思考を切り替える。今はまだ気持ちの整理がつかないし、何が起こったかもよくわからないうちからウジウジ悩んでもしかたない、と思う。

「そういえば、岡本さんとこのアイガモはどうすると？」

何度かまばたきをして気持ちを切り替えていると、三方向から視線を感じて、慌てて出たのはそんなセリフだった。いかにも見え透いた方向転換だったけど、得心した顔でそれに乗ってもらえて、何も聞かれない優しさが、今の僕にはありがたかった。ちなみに岡本さんの田んぼは、公民館から見て斜め向かいの五枚で、内一枚は森の中、二枚は半分以上が侵食されている。無事なのは手前の二枚だけだ。しばらく前からアイガモ農法をやっていて、小さな雛たちが泳いでいるのをついさっきも確認している。

「夜はここに上げてやったほうがいいかもわからんね」

佐々木さんが口を開いた。

「電気がこれじゃあ柵の電流も期待できんしなあ」

いくら引いてもうんともすんとも言わない電気の紐に、自然と視線が集まる。確かに、田んぼを囲っている電線に電気が流れていなければ、<sup>いたち</sup>鼬でもなんでも入り放題だ。

「久坊、ご飯食い終わったら捕まえ行くぞ」

稲じいちゃんが、僕の方を見てにやつと笑った。

アイガモの子供たちも自分たちだけでいるのは不安だったのか、想像していたほどの苦労もなく捕獲作戦は完了した。泥だらけになることも覚悟していたからほっとした気分だ。

もしかしたら田んぼを出て、森に迷い込んだ子もいるかもしれないけど、それはもうしかたない。外も大概暗くなってきたし、今か

ら森の中まで探すのはさすがに無理というものだ。

見つかったアイガモは九羽だった。玄関をくぐってすぐの、土間の一角に囲いを作って寝床にしてやる。その辺の家具なんかを組み合わせただけの簡単な囲いだけど、アイガモの子はまだ両手で包めるくらいに小さいし、人懐こいからこれで大丈夫だと思いたい。一応下には古新聞を敷いて、お椀に水を入れておいた。もちろん、間違って外に出てしまわないように戸締りの確認も忘れない。

そうしておいて、僕たちは和室で雑魚寝をすることにした。不幸中の幸いというのだろうか。今はだから布団の心配をしなくても十分寝れる。寝転がると泥のにおいがするし、ところどころささくれ立ったり染みが付いたりしている和室だが、大人四人が寝転がっても十二分におつりがくる程度にはスペースがある。それに僕にとってこの場所は、物心付いたころから慣れ親しんだ、もしかすると家よりも落ち着けるかもしれない部屋だった。

こうして、遠くにかえるの声を聞きながら、僕たちの新しい生活の一日目が終わっていく。そういえば災害用の避難セットはどこにしまってただろう、そんなことをぼんやりと考えている間に、僕の意識は段々と薄れていったのだった。

今日は疲れた。おやすみなさい。



### 三話 はじまりの日（後書き）

佐々木 忠彦（68）

佐々木さん。最近定年退職して農園組みになった。  
基本的にあまりしゃべらない人で聞き上手。動物好き。

## 四話 少しずつ前に

異変から一週間 公民館

「あの日」から一週間がたった。足りないもの、できないことがたくさんあって、精神的にもかなりきてるけど、生活パターンだけはなんとか安定してきたと思う。

水は裏から汲めるし、食事も何とか目処がついた。災害時用の力パンが見つかったし、裏山の梅や野いちご、それから桑の実も食べられる。それに農園のジャガイモも少し掘り出して使えたし、カブや大根を食べればお腹が膨れた。よそ様の畑から拝借することになってしまったけど、特別事態ということで勘弁してほしい。

それから、近くに川が見つかった。雨が降る前には遠くの音が聞こえるというけれど、ちょうどそんな感じで水の流れるような音が聞こえてきて、見つけることができたのだ。そのまま飲めそうなくらい透き通った溪流で、ジャンプではたぶん渡れないだろう程度の広さがある。今は沢蟹をとるくらいしかしていないけど、近いうちに魚や貝が食べられるかもしれない。

公民館にはガスコンロと簡単な調理器具があつたから、今のところ料理には困っていない。ただ、これからのことを考えると、かまどを作っておいた方がいんじゃないか、ということも話し合った。これからの課題にしていくつもりだ。調味料もなんとか補充のめどをたたせたい。

他にも、朝起きたらラジオ体操をすること。アイガモを田んぼに放して、夜は連れて帰ること。お風呂がないのでタオルで体を拭くようにすること、などなどいろいろと決まりをつくっていった。ちなみにお風呂は我慢するしかなかったけど、ぽつとトイレはそのまま使うことができた。とはいっても、水は流れないからバケツを用意しておいて自分で水をかけるようにしてある。子供のころに経験した水不足を思い出して、なんだか懐かしい。

## 異変から二週間 シルバー農園

僕は愛用の麦藁帽子をかぶって、農園の草むしりをしていた。時々出てくる芋虫や夜盗虫やうとうむしを、道路にばいっと捨てていく。

公民館の周りに取り残された土地の中で、まともに残っている畑や田んぼは実は少ない。具体的には田んぼと畑がそれぞれ二つずつだ。他の田んぼは件並み途中で切れてしまって、水が森のほうに染

み出している。境目に板か何かをはさんでやればいいんだろうけど、そんな道具も余裕もないこの状況じゃあきらめるしかない。

そういうわけで、取り残された合計四つの田畑（内一つはシルバ―農園）。何度か話し合った結果、僕たちはそれを借りて使わせてもらうことにした。本来の持ち主はこの場にいないから事後承諾になっってしまうけど、現状では伺いを立てることもできないし、考えたくないけども二度と会えない可能性だってある。それに、このまま放置してダメにするくらいなら、預かって有効に使わせてもらうというわけだ。

多少良心が痛まなくもないけれど、岡本さん（＊ 田んぼの持ち主）も気のいい人だから、もし再会できたら笑って許してくれると思う。たぶんだけど。

そんなこんなで、僕たちの一日のスケジュールを一番多く埋めているのは、農作業ということになっている。僕も今は農園にいるけど、これが終わったら少し休憩して、岡本さんの方の田んぼをみて回る予定だ。ジャンボタニシを捨てたりピンク色の卵をつぶしたりしないといけない。もちろんこのまま雨が降らなければだけど。

今日の予定を思い出しながら何気なく田んぼの方を見て、僕は自分の目を疑った。もう散々驚いて、少々のことでは動じないと思っていたんだけど、そうでもなかったらしい。

「佐々木さん、佐々木さん。ちょっと」



一緒に作業している佐々木さんを、小声で呼ぶ。佐々木さんは草刈鎌を置いて、こちらに来てくれた。

「あれ、見えます？ 気がついたらおつたとばって……」

僕が田んぼの一点を指差すと、一泊置いて佐々木さんも息を飲んだのがわかった。やっぱり、僕の勘違いというわけではないらしい。

「あれ、やっぱりトキかいな」

僕の問いかけに佐々木さんは、トキだろなあと言った。思わず目を見合わせてしまう。

そんな僕らを尻目に、その赤ら顔をした白い鳥 - なんだか思っていたよりも首あたりが黒くて薄汚れたかんじだった - はしばらく田んぼの中を歩き回っていたが、何かを捕まえたかと思うと翼を広げて、森の向こうへ優雅に飛んでいってしまったのだった。

さて、夕飯を食べながら今日の話を話し合った。トキらしき鳥を見かけたことで、僕たちがどうなったのかを知る手がかりが一つ増えたのだ。

そもそも、今まで僕たちは公民館の周りを取り残して町が、ひいては日本が森に飲みこまれたんじゃないかと考えていた。ところが、日本にトキはいない。少なくとも僕の知る限り、日本のトキはもう絶滅しているはずだ。

そこで、森が出現したのではなく、僕たちの方が移動したとは考えられないだろうか。というのも、日本トキとほとんど同じ見た目の種が、たしか中国にいたはずなのだ。もしここが中国の奥地で、人里離れた森の中に僕たちの方が現れたとしたら、「あの日」を境に気温が下がっていることなど、いくつかの辻褄が合う気がする。

もっとも十分に荒唐無稽な話だし、どうして移動したのかとかというような肝心なことは何もわからない仮説だけど、今まで考えていた説より説得力がある気がするのだ。それに、これが真実に近いなら、僕たちは家に帰ることができるかもしれないし、家族は友達は、今も生きていることになる……。それは僕たちの前に差し込んだ、かすかな希望の光に見えたのだった。

## 五話 少しずつ前に

「あの日」から大体一ヶ月がたった。曜日の感覚が狂ってしまつて正確な日付はわからないけど、今はたぶん七月の下旬、具体的には二十日前後だと思う。

最近田んぼでたまに、トキやサギを見かけるようになった。トキが来ても前ほど驚くことはなくなつたけど、テンションがあがるのは変わらない。チリメンじゃこの中にカニを見つけた時くらいはわくわくする。

さて、最近僕たちの食生活はずいぶん豊かになった。

まず、とうとう魚を手に入れることに成功した。川に竹やら石やらでV字型の囲いを作つて、そこに魚を追ひ込むのだ。昔ウルルン滞在記かなにかのテレビで見た知識を元に、試行錯誤してなんとか作り上げることができた（主にやったのは稲じいちゃんだけ）。なかなかの大物が普通に泳いでいるし、あまり人間に警戒心がないのか結構簡単に誘導することができる。とれた魚はお腹を開いて焼き魚にするか、ぶつ切りにして煮込んで食べるという具合だった。

それから、最近山椒魚おしじいが美味しいことに気がついてしまった。見た目が見た目だからなかなか手を出す勇気が出なかつたけど、今ではもつと早くから食べておきたかつたと後悔している。身はくせがなくて上品な味がするし、お腹に包丁を差し込むと本当に山椒みた

いなおいがして食欲をそそってくる。しかも皮はモチモチしてまた美味しい。ここに来て、川底を探せば案外簡単につかまるものだから、欲を出して取りすぎてしまわないように自制するのが大変なくらいだ。料理法は素直に焼くか、煮込むか。煮込んだときは一晩寝かせると特別美味しくなった。

特に大山椒魚おおさんしょうおの親戚と思われる大物は絶品で、三・四十センチくらいの山椒魚を煮込み料理にしてみると、ほろほろとして格別な味がする。これにはみんなまいってしまつて、お祝い事なんかがあった時の特別料理にすることが決まつたのだつた。

少し目を戻せば、野菜もずいぶんと充実してきた。農園からはジャガイモを全部掘り出して公民館にしまつてあるし、隅に植えてあるゴボウもすくすく育つてきた。さすがに根つこはまだまだ早いけど葉っぱも十分食べられるのだ。今となつては貴重な葉野菜であるキュウリとミニトマトもきちんと実を付けて、ここ何日かの食卓を賑わしてくれている。公民館の裏庭と借り物の畑では、ミョウガが旬を迎えていて、農園と借り物の畑：長いから畑にしよう：ではカボチャの実が膨らんできている。

料理も手馴れてきたのかどんどん美味しくなつた。改めて見れば意外と味にこだわつているとも思う。なにしろ畑にはミョウガにニラ、ネギ・ノビルにシソ、と薬味も多いし、唐辛子もとれるし。最近はずうとマクワウリ・さつぱりしたメロンのような瓜が出るくらいだ。

しばらくはお米がたべられないのが残念だけど、今はジャガイモがあるしもう少しすればカボチャが、そして秋にはサトイモとサツマイモがとれる見通しだ。もっともそのころにはお米も収穫できるだろうけども。

そんな訳で初め心配していたほど食べ物心配はなくなって、多少不便な思いをするにしてもきちんとして生きていけることがわかってきた。畑や田んぼと一緒にあって本当に良かったと思う。もしも着の身着のままで放り出されていたらと思うと、ぞつとする話だ。今日はちよつと贅沢を……なんて言っている余裕はなかっただろう。

着の身着のままに思い出したけれど、今僕たちの生活は衣食住の内、食と住に関してそれなりに恵まれている。でも衣服だけはどうしようもなく低い水準のままだった。さっちゃんを含めて僕たちが持っている服は「あの日」着ていた作業着が一そろえだけ。着替えなんて持つてきていなかったし公民館にも置いていなかった。

当然ながら、そして残念なことに僕たちの服はこの一ヶ月変わっていない。なるべく毎日水洗いをしてはいるけれど、天気によってはそのもいかないし、冬場のことを考えると服は手に入れておきたい。かといって、糸も布もなければ針もないところから服がつくれるわけもなく、たまにアイディアを出し合っては撃沈しているのだった。

それから……僕たちの、家族が増えた。

始まりは川に魚を取りに行った佐々木さんが、げっそりと痩せた子猫をつれて帰ってきたことだった。たぶんどこかの飼猫の子供で、「あの日」巻き込まれてしまったんだろう。その子はずいぶんと衰弱していた。生まれたとはいくほどではないけど、まだまだ大人（成猫）になりきれしていない体で急に森に放り出されては、狩もままならなかったに違いない。川の近くの木陰でぐったりしているのを見つけたそう。

公民館にすればなにかしてあげられたのに、と思った。でも佐々木さんの言うには、たぶん捨てられた（子猫目線）ショックで人間を避けたんじゃないか、とのことだった。かく言う佐々木さんの家は僕たちの間では有名な猫屋敷で、子猫の扱いもなれたものだったし、実際同じような子を保護したことも何度かあるらしい。

濡れタオルで目やにをぬぐってやって、鼻に水をつけてやるとペロツと舌を出して子猫がなめる。それを一時間も繰り返すと少し元気になったのか、お皿から直接水を飲んだ。猫には生肉が何よりの病院食ということで、山椒魚を捕まえてきて、みじん切りにした内蔵を出してやる。初めは警戒していたけど、しばらくほおっておくと内臓の入った小皿は空になった。

佐々木さんによれば、この状態でも体力が回復するかはわからないということだったけど、僕たちの心配をよそに子猫はだんだん元気になって、三日もすると公民館の中を歩き回るまでになっていた。

そして今、公民館には三匹の猫が出入りしている。どうやら巻き込まれた猫はあの子だけではなかったらしい。ミケと名づけた子猫はすっかり元気になって、今は毎日魚や山椒魚や茹でたしじみ貝な

んかをあげているのだが、猫には猫のネットワークがあるのか、はたまた匂いを嗅ぎつけたのか、気が付けば餌をもらいにやってくる猫が一匹増え二匹増え、仲良く頭を並べて餌をむしゃむしゃやるようになったのだ。ちなみに後からきた二匹は若いけども立派な成猫で、クロとブチ、と呼んでいる。安直？ 気にしない気にしない。

しかし後から考えると、いいタイミングだったと思う。あの時ミケの命は風前の灯だったし、逆にもっと早くに猫たちを餌付けしていたらまだ小さかったアイガモが傷つけられていたかもしれない。今はもう襲える大きさじゃないから安心だ。あ、そもそも餌がなかったか。猫は野菜を消化できないという話だし。

まあともかく、僕たちの生活は充実していて、新しい家族も増えました。大変なことも辛いときもあるけど、僕は元気にやっていますという、そんなお話。

## 六話 本日八晴天也

「カーっ 暑か」

稲じいちゃんがタオルで顔を拭いてぐっつと背伸びをした。

「お疲れ様ー ほしい水筒」

返事をしながら僕も、首にかけたタオルで汗をぬぐう。ついでに置いてあった水筒を稲じいちゃんにパスする。「あの日」からこっち、多少過ごしやすい気温になったとはいえそれはそれ。夏はやっぱり暑いし、最近梅雨明けのガラガラした日差しのかわりに湿気が多くて蒸してくる。麦藁帽子をしているとはいえしばらく作業をしていれば、あっという間に汗だくだ。田んぼの中の作業という足元が涼しそうに聞こえるけど、長靴を履いているからむしろ下の方から蒸してくる。裸足でやれば気持ちいいんだろうけど、怪我とか虫とか、何より平口・ひらくち（マムシ）が怖くてさすがにできない。ここは何かあれば病院で治療が受けられる文明社会ではないのだから。

「やつぱりまだおるねえ」

田んぼの中で拾ってきたジャンボタニシを放って踏み潰す。と、近くのアイガモが寄ってきてあっという間に殻だけになってしまった。ついでに近くの子をなげてやる。最近はこの子達も大きくなつたし、危険そうな動物も見かけないということ、あえて公民館に上げてやることもなくなつた。その分苦勞は減ったけど、こうして



かまってやれる時間も少なくなつて寂しい限りだ。

「大分減つたばつて、敵もなかなかしぶといばい」

稲じいちゃんがタニシの殻を見て、笑いながらそんなことをいう。僕も全面的に賛成だ。またつく、この二ヶ月ちよつと付きつきりで相手をしているのにいったいどこから湧いてくるのやら。じつはタニシの方がゴキブリよりもしぶといんじゃないかと思つてしまう。とはいえ成果が出ていないわけじゃなく、ここ最近目は凝らして探しまわらないと見つからない程度にまで減っている。かなうなら、このままいなくなつてもらえとなおありがたい。

「一回汗流してきてもよか？」

あぜ道に腰を下ろして水筒のお水を飲んでいる稲じいちゃんに話しかける。ちなみに僕はごろんと大の字だ。しめったTシャツが肌にはりついて気持ち悪い。いまさら汗が汚いとは思わないけど、さすがに一度水浴びしてさっぱりしたい。風が吹けば涼しいとはいえ、服のべたつきと蝉の合唱で、不快指数は五割増した。

「おう　よかよか、俺もいくばい」

稲じいちゃんものつてくる。よっこいしょと立ち上がつて、差し出された水筒を受け取った。僕も一口飲んだ後、水筒のふたを振り回して水気をとばす。

「稲じいちゃん、今日の晩なんがよか？」（なにがいい？）

テコテコと公民館<sup>いえ</sup>に帰るあぜ道を歩きつつ、聞いてみる。今日は僕が料理当番なのだ。……なんでもいいのか、ふむ。予想通りの答えだ。正直期待はしていなかった。

「昨日山椒魚を焼いたがのこつとーけん。後は馬鈴薯・ばれいしょ（じゃがいも）をふかして……いやもったいないか。キュウリ何本いけそう？」

馬鈴薯は来年の（それまでに助かるのが理想ではあるけど）種芋のことを考えると、そろそろ考えて食べないといけない。無くなればスーパーで買ってくるなんて訳にはいかないんだから。

「五本はあつたばい。ああそれからトマトもそろそろ取っちゃらんと」

「ならそれで。ミヨウガと紫蘇と入れて和えよつか」

つらつらと考えている間に、すぐ泉のところに帰ってきて、ついでに今晚の献立が決まってしまった。昨日の山椒魚をぶつ切りにして炒めなおして……うん、ゴボウ菜と大根を刻んで山椒魚の炒め物にしよう。それから、キュウリの和え物にミニトマトを添えて、カブを焼こうかな。お塩も節約しないとなあ。

「そうだ、今日貝さ採りいきたいんよ。覚えといて」

「若えモンが覚えとかんでどうするかっ」

稲じいちゃんと掛け合いながら服を脱いで、バシャッと頭から水をかぶる。さすがは湧き水、夏だというのに思わず体が縮こまるような冷たさだ。……羞恥心？ そんなものは小学生のころに捨ててきた。泉の端に腰掛けて濡らしたタオルで体を拭くと、汗のべたつきがさつと引いて気持ちがいい。ちなみに、当然といえば当然だけど僕たちが水浴びをしているのは、飲料水をとる水槽よりも一段低い場所だ。さすがに、自分の汗やら泥やらが混じった水を飲みたいとは思わない。

……ついでにさっき脱いだＴシャツとズボンと下着を忘れずに洗っておく。せっかくさっぱりしたのに汗臭い服を着るのはごめんだし、きつく絞って日向に干しておけば、作業に戻るころにはそれなりに水が飛ぶのだ。もちろん絞るときは縦で。雑巾絞りと同じで、親指同士がくつつくような絞り方だと水気が残って乾きが悪い。

あーそういえば縦に絞るとよく水を切れるってテレビで知ったんだよなあ。あの番組まだやってたっけ。金太郎ゲームとか懐かしいなあ。

さらさらと流れる水で手を冷やしながらぼけーっと考える。特に何事もない、八月の昼下がりの光景だ。

……あ。

「稲じいちゃん」

「ん？ どうしたね」

「なんか、ほれ頭の上。トンボがとまりんしゃった」

うん。特に何事もない、八月の昼下がりだ。

この後やぶ蚊の群れに襲われなければなおよかったんだけど、まああのんびりとしたいつもの一コマ。

## 二章 七話 月の綺麗な夜に

びゅうつと音を立てて風のカムイ様がおつていく。日のカムイ様はとうにいらなくなってしまって、私は木の洞の中で身を小さくして震えていた。ああ山のカムイ様、樹木のカムイ様、月のカムイ様、私を守ってください……もう何度目かわからない祈りを、私をつつむカムイ様にささげる。

村ではきつと私が帰ってこなくて大騒ぎだろう。ヌイちゃんには誰かお乳を飲ませてくれているかしら。心配事をひとつ思いつくともういけなかった。どんどんと不安が大きくなって、よけいに心細くなってくる。

怖いよ。お母さん、お姉ちゃん……。口に出してつぶやいてみても、帰ってくるのはひょうひょうという風の音だけ。道を覚えるのが下手なのはわかっていたのに、お姉ちゃんとはぐれてしまった時から、きつとこうなることは決まっていたんだ。

ひざを抱えて涙を服に吸い込ませると、布にこすれてまぶたが赤くなるのがわかった。それがまた悲しくて後から後から涙が出てくる。

ふと。

風の音に混じって、何かの音が聞こえた気がした。

一年目 九月上旬

それは、稲じいちゃんの提案から始まった。お米の穂がだんだん大きくなってきたころ、かなかな蝉の声を聞きながら、公民館で夕涼みをしていたときの話だ。だんだん涼しくなってきたねえ、なんていう取りとめのない話が途切れて、気まづくもない落ち着いた沈黙が流れたとき。隣からポツリと声がした。

「……そういえば久坊」

なん？ と返事をする稲じいちゃんは、今年は夏祭りがないなあと呟いたのだった。

「たしかになあ。残念やけどそんなこと言つとられんしねえ」

僕の答えに稲じいちゃんはもう一度、夏祭りがないなあと呟いた。

「なあ、久坊。太鼓ばあつたなあ」

確かに公民館の敷地内には倉庫があつて、中では大太鼓が埃をかぶっているはずだ。町内で小さなイベントやお祭りがあるときに、引っぱり出して使う太鼓だ。

「ははっ うちらだけで盛り上がるかいな」

僕がそう返すと稲じいちゃんはいつと笑った。さすがに、そこまですぐにヒントをもらえば稲じいちゃんの考えていることぐらいにわかる

つてもんだ。盛り上がるかじやなか、盛り上げるったい、と息巻く稲じいちゃんに僕もにっと笑い返した。いいねそいうの、嫌いじゃない。

それから数日後。お昼を過ぎてしばらくしてから僕たちは”夏祭り”の準備を始めていた。倉庫を開いてえっちらおっちらと太鼓を持ち出してくる。会場は公民館の駐車場と目の前の道路。駐車場の真ん中よりすこし道路側に太鼓の台を設置した。本当は鉄パイプを組み立ててつくる櫓やぐらもあつたけど、人数が人数だからそこまではやらない。いつもなら櫓の周りにたらす紅白の幕は、かわりに公民館の軒のきに縛り付けた。

一番の力仕事が終わったら、今度はさっちゃんと一緒に台所にこもる。昨日作って一晩置いた大山椒魚の煮込みに火を入れなおしつつ、1cm程度に切つてそろえた小ネギをちらしていく。お箸でつついてみると山椒魚の身もいい塩梅にホロホロだし、サイコロ状のカブにもしつかり味がしみているらしい。一口味見してみると、カブやゴボウの風味と一緒に山椒魚や貝の旨みが食欲をそそつてくる。ほんのりきいた塩味と干し梅の酸味が味を引き立てていて、ピリツとした唐辛子の刺激がたまらない。一緒に食べられるように、よく洗ったミョウガをせん切りにして小皿に盛っておく。それから干し梅の種を抜いて、同じくせん切りにしておいた。隣の鍋を見ると、カタカタと蓋がなっている。竹で作った即席スノコをしいて、ジャガイモとカボチャをふかしているのだ。この分だと、時間には余裕で間に合うだろう。ジャガイモは数が心もとなくなってきたい

るけど、今日は大奮発だ。あ、サワガニを洗ってるんだった。逃げ出していないか見に行かないと……。

- ドン ドン ドン -

- タカ タッタ -

- ドンドン ド ドン -

日がだんだん傾いてきたころ、”夏祭り”が始まった。何日かけて準備したご馳走をつまみつつ、太鼓を叩いて好きなように踊る。阿波踊りらしきものをしてみたり、ドジョウ掬いをやってみたり、はたまた日本舞踊や歌舞伎の真似をしてみたり、それとも何も考えずにその場のノリで踊ってみたり。公民館の屋根と近くの木の間にはロープやツタをかけて、提灯の変わりによくわからないオブジェや旗をいくつもぶら下げている。

空はだんだん暗くなって、山際がうつすらと明るいだけになってしまった。といっても、祭りの本番はこれからだ。疲れたら休憩をはさみつつ、交代しながらみんなで叩く太鼓の音が、子気味良いリズムでお腹に響いてくる。空はおあつらえ向きに晴れていて、視線を上げれば円になりかけの月が良く見えた。気の早い星もいくつか



顔を出している。お酒がないのは残念だけど - 本当に残念だけど -  
これで楽しめなくちゃ九州男児がすたるっていうもんだろ。例え  
それがたった四人の夏祭りだったとしても……。

子供でも知っていることだけど、楽しい時間というのはあつとい  
う間に過ぎていく。あたりが真っ暗闇になってからしばらくたった。  
最近今まで以上に早寝早起きが習慣づいていたせいか、深夜特有の  
変なテンションになりつつもだんだんまぶたが重くなってくる。”  
それ”に気がついたのは、お腹も膨れ満足するまで踊り、もう少し  
したらお開きにしようか、という空気になったころのことだった。

眠気が空のかなたへ飛んでいって、かわりに、背中をツーツと冷  
たいものが流れていく。

僕たちは四人。この場に見えるのも四人。僕以外気づいていない  
ようだし、どこもおかしいところは無いように見えるが少し待って  
ほしい。僕たちの中には当然僕も入っているわけで、そして自分の

視界に自分が入ることは鏡でもない限りありえないわけで、ここに鏡は無いわけだ。

まずは落ち着こう。深呼吸をしてお茶・湧き水で冷やしたとっておきのどくだみ茶 - を一杯飲んで、改めて数えてる。まず僕が一人、うっかり忘れないように最初に数に入れておく。それから今は太鼓を叩いている佐々木さんが一人。結構さまになった踊りをしているさっちゃんでもう一人。太鼓に合わせて歌って踊れる祭りの漢ことおとこ稲じいちゃんが一人。……一緒に踊っている人影が一人。

やっぱりおかしい。とくに最後あたりどう考えてもおかしい。なんか普通に踊ってるし、暗いから顔とかよくわからないし、あんまり頭が働いてないしで今まで気づかなかったんだろうけどなんか増えている！これは、あれだろうか。ロウソクを一本ずつ消していくと最後に知らないお友達が増えているようなあれなんだろうか。いやそういうのが好きな人にはたまらないのかもしれないけども、残念ながら僕はそういう人種じゃない。どちらかという話が終わるまで部屋の隅でガタガタ震えているようなタイプだ。むしろ真っ先に部屋から出て行くタイプだ。あいにくと嬉しくもなんとも無い。

戦々恐々としながらも、僕はその人（？）から目を離せないでいた。暗くてよく見えないけどたぶん 希望を含めて 足はあるし浮かんでもない。背はあんまり高くなって白っぽい服を着ている……と思う。

声をかけるべきなのかやめておいた方がいいのか、神経をすり減らしつつ前に一歩出てやっぱり勇気が出ずに一歩下がって、ということを繰り返していると……。

踊っていたその人(?)は、何かにつまづいたのかズベツとこけたのだった。

## 二章 七話 月の綺麗な夜に（後書き）

### ・干し梅

梅の実を干したものの。梅干を乾燥させたいいわゆる「干し梅」ではなく、梅の実を使ったドライフルーツ。すっぱい。塩は使っていない。

本田 久（24）

本作の主人公。小さなころからおじいちゃん・おばあちゃん達と遊んでいたため、考え方や知識が一般的な同級生から見ても少しずれている。

## 八話 月の綺麗な夜に

木の洞の中で膝を抱えていると、風のカムイ様が通り過ぎる音に混じって、何かの音が流れてきた。顔を上げて、耳を澄ませてみれば、ドン ドンと遠くの方から響いてくる。

もしかしたら誰かが、迎えに来てくれたのかもしれない！ 不安な気持ちを押し殺して、そっと洞を抜け出した。…… あっちだ。お月様が隠れてしまわないように祈りながら、音のほうに歩いていく。

しばらく森の中を進んでいくと、音はだんだん近くなってきた。それにつれて、まるで雷様が落ちたときのように、体が震えるのがわかった。ドン ドン、という響きに合わせて体がジーンとなる。この先にいるのが、私を探しに来てくれた人たちじゃないことは、とうにわかってしまった。

- 森の奥にはえらいカムイ様がいるからね。勝手に入ってはいけないんだよ - ふいに、おばあちゃんの言っていたことを思い出した。でも、止まろうと、これ以上近づいてはいけないと思うのに、私の足は言うことを聞いてくれない。焦る思いにそっぽを向いて、私の体はまるで音が鳴るほうに引き寄せられるように……

一年目 九月上旬

僕の目の前で不審な人（仮）影が転んだ。それはもう漫画かコントのような綺麗な転び方だった。駐車場の草が生えたところだったからよかったけども、これが道路の上とかだったら膝小僧が大変なことになっていただろう。アスファルトの上でこけるのはいたいたいのだ。

そんなことはともかくとして、さすがに僕もいきなり転ぶとは思っていなかったし、さっちゃんたちも転んだ”誰か”に気がついたみたいだ。さっきまで景気良く拍をとっていた太鼓の音が止んで、痛いくらいに静かになった駐車場。さっきまではあまり聞こえなかった虫の音に背を押されて、おそろおそろ近づいてみる。草の上に倒れたとはいえ、なにかの弾みで怪我をしたかもしれないし。

僕がその人（仮）のところについた時には、初めから近くで踊っていた稲じいちゃんと佐々木さんはもうその人（仮）の傍にいて、さっちゃんがしゃがんで声をかけているところだった。転んだ姿勢のまま、上半身だけを起こして、おろおろと周りを見回しているその人 - 近くで見るとちゃんと足があるし透けてもいなくて、目は二つ、口は一つだった - はどうやら中学生か高校生くらいの女の子のようだった。どこことなくアジア風に見える質素でゆったりしたワンピースを着ていて、丸く可愛らしい顔立ちの中に揺れる不安そうな目が印象的だった。女の子はいかにも動揺した雰囲気で、僕たちの顔を順番に見回している。隣にしゃがんださっちゃんが、ゆっくり背中をさすってあげていた。

しばらくそうしていると、女の子も少し落ち着いてきたようだった。

た。僕たちは変に刺激しないように一步下がったところで見守っていて、さっちゃんが時々「どうしたんね？」とか「どこか痛か？」とか優しく話しかけている。女の子はもう一度僕たちを見回して、さっちゃんの方に向き直ってから、初めて口を開いた。それは少し幼さがのこった柔らかい声で……。

「なあば ふちかむいか？」

若干予想はしていたけども、何を言っているのか全くわからなかった。

さっちゃん・稲じいちゃん・佐々木さん、と順繰りに顔を見合わせるけど、やっぱり誰もわからなかったみたいだ。うすうすそんな気はしていたけど、ここは日本じゃないんだろう。女の子の言葉は日本語とも中国語とも、もちろん英語とも違っていて、強いて言うなら韓国語の発音を柔らかくして、話す速度をゆっくりにしたような感じだった。もしくは、鹿児島とか東北とかのお年寄りが使うこつてこての方言に近いかもしれない。あくまでイメージだけれども。

「なあば ふちかむいか？」

さっきより小さな声で女の子が繰り返した。なんとなく何かを質問されているのはわかるんだけど、いかんせん肝心な内容がわからないから答えようが無い。さっちゃんもどうしようか、と困っているようだった。ただ、このまま返事をしないのはよろしくない気がする。僕はそう思ったし、さっちゃんも同じだったんだろう。女の子に声をかけようとして、か細い声に遮られた。

「なあば めういか？」

女の子の声は震えていて、ほとんど泣きそうな具合だった。たぶんさつきから何度も出てきた”ナアバ”っていうのは、さっちゃんのことなんだと思う。女の子は話すときに色々身振りをしている、“ナアバ”と言うときには必ずさっちゃんを指差しているからだ。その後はなんていったかわからないけど、たぶんさっちゃんが返事をしないから不安に思ったんだろう、ということとは想像できた。

「大丈夫よ、なあんも怖なことなかよ」

その辺はさっちゃんも気づいたんだろう。というより、子供のお世話に関して僕が気づけたことに、さっちゃんが気づかないはずが無い。さっちゃんが声をかけつつ背中をトントンと叩いてから、ぎゅつと優しく抱きしめてあげると、女の子はしばらくしてまた落ちて着いてきた。でも、やっぱり言葉は通じないみたいだ。

そうしているとふと気配を感じて、振り向くといつの間にか佐々木さんが僕の横に立っていた。心臓に悪いからやめてほしい。はい、とお茶が入ったコップを渡される。佐々木さんを見ると、目でさっちゃんの方を示された。……こういうちょっとした気配りは、ほんとにかなわないなあと思う。佐々木さんの意を受けて、女の子を怖がらせないように近づいて、さっちゃんにコップを手渡した。さっちゃんは小声でありがとう、と言って女の子にコップをあげている。

最初は躊躇していたようだけど、さっちゃんに身振り手振りで说得？　されて、女の子はお茶を一口飲んだ。たぶん喉が渴いていたんだと思う。一口飲んだ後は一息にお茶を飲み干して、それで安心したのかコップを握り締めたまま夢の世界に旅立ってしまった。



「そつとよー。起こさんようにね」

ひそひそ声でさっちゃんが注意する。あの後、眠ってしまった女の子はさっちゃんに任せて、僕たちはとりあえず太鼓やらなんやらを片付けた。本当は後回しにしたかったけども、寝ている間に雨でも降ったら一大事だ。一通り屋根の下に運び込んだ後、今度は女の子を稲じいちゃんがかかえて寝る部屋まで運ぶことになり、今に至る。ところどころささくれ立った畳の綺麗なところを選んで、稲じいちゃんがそつと女の子を下ろした。お役御免になった懐中電灯を消して、節約のために電池を抜き取る。部屋の中はあつという間に真っ暗になった。一泊置いてだんだんと目が暗さに慣れてくる。

「おつかれさん。俺らもねようかね」

稲じいちゃんが、最後に女の子の頭を一なでしてから立ち上がった。最近はだいたい決まってきた”自分の寝場所”に陣取って、いつもどおり雑魚寝する。さっちゃんだけは、女の子の傍で添い寝するみたいだ。

なんだか今日は大変だった。お祭りは全力で楽しんだし、現地の人……だろう子と初めて会って、言葉が通じないままその子は寝てしまつて……。親御さんが心配しているだろうし、早く家に帰してあげないとなあ。どこから来たんだろう、いままで近くに人は住んでいないんだとばかり思っていたけど、案外近くに村があったんだなあ。それに、聞いたことの無い言葉だったけど、いったいここはどこなんだろう……。

だめだ、頭が働かなくなってきた。それじゃあ、おやすみなさい。

## 八話 月の綺麗な夜に（後書き）

・森の奥には……

子供に言うことを聞かせるためのテンプレート。

わがままばかり言っているとお化けに食べられちゃうよ！  
みな。

女の子が話している言語は結構適当です。専門的な知識のある方には突っ込みどころしかないと思いますが、フィクションというところで流していただければ幸いです。また、繰り返しますが適当ですので、そういう言葉があるんだ、と誤解しないようお願いいたします。

## 九話 たんとお食べ？

明け方。人の動く気配がして、僕はうつすらと目を開けた。同時に思ったより低い気温に体を縮こまらせる。早朝にしか味わえない清々（すがすが）しい空気と、おもわず小さな声で話してしまうような静けさが、少しずつ眠気を吸いとっていった。そろそろ日が昇るのが、窓から見える空はほのかに青い。

いつも通りの時間といえそうなんだけど、昨日も遅かったし正直も少し寝ていたかった。心の中でぼやくつつ、目が覚めてしまったのはしょうがない。一度気合を入れてからよつこいしょ、と体をおこした。当社比二割り増しにだらしない胡坐あぐらをかいて、時々体をほぐしながらぼけーっとする。だんだんと頭がさえてきて、ふと”彼女”と目が合った。

どうやら目が覚めたららしい昨日の女の子の目は、改めてみてもやっぱり不安そうだった。まあ、言葉が通じない上に朝おきたら知らない部屋、という状況で不安になるなという方が酷な話かもしれない。さてどうしようか、稲じいちゃんトイレにでも行ったのか部屋にいない。佐々木さんはまだ寝ているし……と、改めて見てみると、さっちゃんが女の子の隣で僕に手招きをしていた。とりあえず呼ばれてしまったので、膝立ちでさっちゃんの方に行く。

「おはようございまーす」

「おはようさん」

お互いにあいさつをしつつ、ほどほどの距離で座る。うーん、弟

みたいな近所の子はいたけど妹はいなかったから、いまいち距離感がつかめない。

「今ねえ、名前ば聞いとったとよ」

どしたん？、と聞くとさっちゃんは女の子の頭をなでて、そう言った。いったいどうやって話をつけたのか、さすがのさっちゃんだ。

「ホノ」ちゃん、ちいうとよね？」

さっちゃんが名前を強調しつつ女の子に聞くと、その子……ホノちゃんは小さくうなずいた。

「ああば ほの」

自分をさしてホノちゃんと言う。なるほど、そうして意識してみれば、名前だけは聞き取れた。

「なあば さきえばん？」

今度はさっちゃんを示してそう言った。昨日も思ったけど、やっぱり「なあば」は「あなた」っていう意味な気がする。するとさっき言っていた「ああば」は「わたし」かもしれない。「ばん」は……わからない。さっちゃんはどこまで解っているのか、さきでよかよ、と言ってホノちゃんをなでていた。

「なあば さきばん？」

ホノちゃんが聞きなおすと、さっちゃんは相好を崩してうんうん、うなずく。いつの間に仲良くなったのか、はたから見ていると、二人はまるで仲のいいおばちゃんと孫みたいだ。そこに、さっき見た不安そうな色は無くて少しほっとする。と、いつのまにかさっちゃん、にこにこして僕を見ていることに気がついた。まあ、僕を呼んだのはそういうことなんだろう。

「はじめまして、 ひさし といいます。……えっと、” ああば ひさし ” あってるかな？」

改めてホノちゃんの目を見てから、自分を指してそう言う。ホノちゃんも、さっちゃんも、後半のところでも少し驚いた顔をした。

「なあば ひさしばん？」

ホノちゃんがやっぱり聞いてくるので僕はそれに大きくうなずいた。よかった、正しいかどうかはともかく、しつかり意味は通じたみたいだ。相手の名前がわかって、自分の名前を呼んでもらえる……。今まで意識したことはあまり無かったけど、それだけでぐっと距離が縮まった気がするから不思議なものだ。だから、僕もお返しに名前を呼んだ。

「僕も、ホノちゃん っち呼んでよか？」

どこまで伝わったか解らないけど、ホノちゃんは、うん、とうなずいた。他人に押しつけるわけじゃないけども、子供は笑顔なのが一番だと思う。少なくとも、不安そうな顔よりはずっと。

その後、帰ってきた稲じいちゃん、おきてきた佐々木さんもそれぞれ自己紹介をして、寒い寒いと言いながら水浴びとトイレを済ませて、僕たちは今、日課のラジオ体操をしている。ちなみにホノちゃんには、さっちゃんがつききりでここでの”いろは”を教えてあげていた。さっきさっちゃんに聞いたけど、ホノちゃんはトイレの使い方を知らなかった……というか便器を見たことがない様子だったらしい。さすがに詳しくは聞かなかったけど、やっぱりここはどこかの国の奥地みたいだ。

いっち、にい、さん、しい

ごー、ろく、しち、はち

にい、にい、さん、しい

ごー、ろく、しち、はち

さっちゃんがホノちゃんにお手本を見せて、ホノちゃんがそれを真似して……というのを繰り返しつつ、いつもよりのんびりしたペースで僕たちはラジオ体操を進めていった。別に音楽を流してやっているわけじゃないから、多少時間がかかってもおせらない。見よう見まねで体操をしたり、掛け声に加わったりするホノちゃんは、すごく癒しオーラをだしていると思う。僕だけじゃなくて、稲じいちゃんも佐々木さんも、目じりが下がっていて、さっちゃんは言わ

ずもがなだ。年頃の女の子に失礼かもしれないけど、小学校低学年の子が一生懸命体操しているのを応援しているような気分……いや、さっちゃんたちのあれは孫娘を見守る目かもしれない。

ともかくとして、一通りラジオ体操をこなした後、かるく柔軟体操をして朝の準備運動は終了だ。

今日はごはんの当番じゃないからちよつとゆつくりできる。とりあえず配膳だけしておいて……あ、ホノちゃんの分の食器を洗つとかないといけない。早めに気がついてよかった。取りに行つてこよう。

今日の朝ごはんのメインは一口カボチャだった。昨日食べ切れなかったあまり物だ。それに（まだ小ぶりな）サツマイモの輪切りを焼いたのが一人二切れと干し梅が少々、他あまり物が小皿に少し、昨日のサワガニ汁にタニシ（川でとれた巻貝、田んぼの憎いやつではない）を足したものがついている。昨日が昨日だったおかげで、朝ごはんにはずいぶんと豪華だ。ホノちゃんの歓迎もかねてられちようど良かったと思う。カボチャとサツマイモの黄色が鮮やかで美味しそうだ。

みんなでそろって、いただきます、をする。



「はんあい！」

おそるおそる、といった感じではじめにサツマイモを食べたホノちゃんが、びっくりしたような声を上げた。顔をうかがってみると、さっきまで匂いをかいだり色んな角度から見たりして調べていたのが嘘のように、キラキラした目をしてサツマイモをながめている。その様子を見る限り、悪い意味の言葉ではなさそうだった。こんな食べ物見たことが無い！ という様子だったし、口に合わなかったらどうしようか、という思いは杞憂だったみたいだ。自然（その様子を温かい目で見守っていた）僕たちも笑顔になる。ほかにもいくつか食べた後、やっぱりサツマイモがお気に入りだったようなので、ホノちゃんのお皿にはお芋さんが積み上げられた。ダメだこの人たち、降って湧いた可愛い孫（くらいの子）に骨抜きにされてしまっている。

僕はおじいちゃんバカ、おばあちゃんバカ全開の三人に呆れてしまつて、ついついサツマイモを二枚とも寄付してしまつた。

その後ホノちゃんがお箸に興味を示し、それまでは手で摘んで食べていた、僕たちがお手本を示しながら一生懸命使い方を教えることになるのだけれど、それはまた別のお話。

九話 たんとお食べ？（後書き）

という訳で、きちんとはじめましてをする第九話でした。新キャラの名前はホノちゃんです。彼女の最後のセリフを考えるだけで、いったい何時間かかったことか……。

## 十話 お話をしよう

楽しい食事が終わり人心地付いたところで、改めてホノちゃんとの”お話”をすることになった。とはいえ、僕たちが……少なくとも僕がわかるホノちゃんの言葉は「あぁば（わたし）」と「なぁば（あなた）」だけ、逆にホノちゃんが理解できていそうな僕たちの言葉は「これ」と「こう」だけだ。お互いがよく使う、簡単なセリフを覚えたかたちになるわけだけど、なるべく楽観的に見たとしても会話が進む気がしない。

そもそも、食事中にまがりなりにも意思の疎通がとれたのは、身振り手振りと表情（顔芸）と、それから現物・目の前のご飯・を話題にできたからだだった。正直、半分以上はノリと雰囲気だったと思う。が、僕たちがホノちゃんに聞きたいのは、どこから来たのか、とか、これからどうするのか、とかそういう抽象的なことだ。外国語を覚えたければ現地に行けばいい、とはよく聞くけども、基本的な単語もわからない、ガイド本もないし教えてくれる人もいない、というこの状況は、あまりにもよろしくない。

そんな悩みを解決してくれたのは、意外というかむしろ順当というか迷うが、さっちゃんだった。

さっちゃんいわく、言葉が通じないなら筆談をすればいいじゃない、ということだった。もちろんお互いの文字が通じるなどとは、

はなから考えていない。同じ筆を使うにしても、絵を通じた”お話”だ。

まず、裏の白いチラシとボールペンを準備する。さつき朝ごはんを食べた机……そういえばこれはなんていう名前なんだろう。細長い長方形でちやぶ台くらいの高さのやつで、宴会のときとかに引張り出すあれだ……の上をきれいにして、”お話”おえがき道具をホノちゃんの前に並べていった。何がなにやらわからない、という顔をされたが、気持ちはわかる。

ともかく、やってみなければ、文字通り話にならない。ちなみに、質問をするのはさつちゃんだ。絵が上手だし、一番ホノちゃんが緊張しない相手を選ぶとなると、どうしてもさつちゃんになる。

あんね、と言ってさつちゃんが紙の真ん中に家のマークをかいいた。

「”これ”が”ここ”よー。わかる？」

地図の家マークを指してから足元を指す。ホノちゃんはあんまりわかっていないみたいだった。もっとも、言葉の通じない相手にこれだけですべてが伝わるなら、それは超能力のたくいだらう。

「これが、ああば、ひさしばん、たろばん、ただばん、」

家の横にさつちゃんと僕、稲じいちゃんと佐々木さんの似顔絵ができた。ホノちゃんにも、だんだん何がしたいのか伝わってきたようだ。感心したようにうなずいたり、絵と本物を見比べてくすくす笑ったりしている。すごくデフォルメしてあって、しかも丁寧にかきこんだわけでもないのに、しっかりと誰かわかる程度に特徴をと

らえているんだからさすがだと思う。

それからさっちゃんは田んぼと川を歩いていった。川はそれだけだとはよくわからない二本線になってしまつて、佐々木さんのアイデアを採用した結果、魚がはねているイラスト付だ。絵だけではわからないので、部屋の壁を使つてここからここまでくらい、と川の広さを説明する。正しく伝わったかどうかは、この際後回しだ。最後にホノちゃんの似顔絵が、家マークに向かった矢印付きで、かき込まれた。横から見ているとまるで「このまちだいすき」みたいだ。

「これが、なあば」。ホノちゃんはどっからきたと？」

ジェスチャーをまじえつつ、さっちゃんがホノちゃんに質問する。一緒にボールペンも手渡した。

ホノちゃんはしばらく考えた後、ボールペンとにらめっこをしていた。くるくる回してみたり、指先にちよつとインクをつけてみたりしてボールペンを調べると、今度は紙が気になるのか表面を擦つて不思議そうな顔をしている。なんだか初めて鏡を見た子猫みたいで微笑ましい光景だった。

子猫で思い出したけど、昨日からうちの猫さんたちがあまり顔をみせてこない。まあほとんど放し飼いみたいな状態だから、ふらつといなくなることはあるんだけど、三匹とも一緒にいなくなるのは珍しい。さつき縁側にひよこつと出てきたクロ介も、こちらを見て一瞬固まったと思うとテコテコと庭を横切つてどこかにいつてしまった。いつもだったら縁側で日向ぼっこでもしているのに珍しい。もしかしたら知らない人を見て、一丁前に緊張でもしてるんだろうか。

われらが猫さんズのことはこの辺にして、ホノちゃんの話に戻ろう。ボールペンと紙をしばらくいじって満足したのか、ホノちゃんは今絵をかいている。どうやらこちらの意図は伝わったようで、一安心だ。紙の右下のほうに海苔をまいた三角おにぎりのようなものがいくつかできていく。力のこめすぎで紙をやぶるようなこともなく、ホノちゃんの筆の動きは危なげがない。少し考えながらも、その顔はどことなく楽しそうで、もしかしたら絵をかくのが好きなのかもしれない。

そうやって程なく出来上がったのは、三角おにぎり五つと、少し離れて池らしきものが一つ。池（もしかしたら湖かもしれない）にはかわいらしい魚がおよいでいた。こちらのイラストの意味も正しく伝わっていたらしい。村の左上のほうにあるのは……キノコだろうか？ さつちゃんがかいた公民館との間にあつて、おにぎりキノコ 公民館の順番に矢印がひかれている。

……この子、実はとんでもなく頭がいいんじゃないだろうか。少なくとも僕に、言葉の通じない人がかいたイラストやら記号やらを、正しく理解できる自信はない。矢印つてのはもしかして全民族共通の記号なんだろうか。いやそんな馬鹿な。

「これ、家とちがうね」（家なんじゃないかな）

おにぎりを指して佐々木さんが言った。危ないあぶない、思考が変な方にいつてしまっていた。

「吉野ヶ里の……なんて名前だったか、あの家が、こげん格好しとうでしょう」

佐々木さんが続ける。吉野ヶ里……遺跡……たてあなしき 竪穴式住居か！ そ

う言われてみて視線を戻すと、確かにおにぎりは竪穴式住居に、海苔はその入り口に見えてくる。すると、ホノちゃんが住んでいるのは、弥生時代くらいの文明の集落なんだろうか。それとも、実際に見てみると想像とは違った姿なのかもしれない。今はアマゾンの奥地でもユニクロの服が出回っているような時代だし。それとも、モンゴルのパオミみたいな家なんだろうか……。

家の形はともかく、この絵を見る限り、そして自分の解読能力を信じる限り、どうやらホノちゃんは集落からキノコを取りに来て、どういう訳かここにたどり着いたということみたいだ。ここから歩いていける距離に集落があるのか……。

僕たちの目は自然と合わさった。

「ホノちゃんを村まで送ろう。」

初めにそう言ったのは誰だっただろうか。もしかしたら同時だったのかもしれない。あるいは誰も口には出さなかったのかもしれない。ともかく、僕たちの中に異議を唱える人はいなかった。いくら一人でここまでこれたとはいえ、女の子を一人で森に帰してはいさよなら、というわけにはいかない。安全対策っていうのは過剰なくらい、無駄になるくらいがちょうどいいのだ。それに、僕たち（証拠）がいれば、ホノちゃんも心配したであらう親御さんに事情を説明しやすいだろうし。

とはいえ、その意見が100%純粋な善意から出た、という嘘になってしまう。もちろんその気持ちは本当だけど、その裏でほんの少しの打算があるのも本当だった。

だって、いいかげんに寂しかったのだ。

この何ヶ月も僕たちは外から切り離されて、四人だけで暮らしてきて。確かに楽しいことはたくさんあった。これまで考えもしなかったような貴重な体験をしたし、びっくりするほど綺麗な景色に何度でもあった。もともと絆はあったけど、今ではもう、僕たちは本当の家族みたいなものだった。

でも、きつとずっと寂しかった。

家族と、友達と、会えずにいることだけじゃない。周りに人気がない・賑やかな場所に行けないというのは、思いのほか寂しくて、思いのほかこたえるのだ。今まで気づかずにいたけれど、ホノちゃんともであつた今、もう見ないふりはできなくなってしまうている。だって、ホノちゃんと話すのは、本当に楽しくて、嬉しかった。それはもういい歳した大人がそろって、ガラにもなくはしゃいでしまいうくらいに。今ならコミュニケーションの大事さが、人間は社会の中で生きる生き物なんだってことが、よくわかる。あくせくしているときは静かな時間が欲しくてたまらないくせに、きつと僕たちは本当の一人になったら生きていけないし、家族といえるだけでも満足できない、わがままで繊細な生き物なのだ。なんて。

だからホノちゃんと離れて、また孤立するのが怖かった。自分が寂しがっていたことを知ってしまったから。ホノちゃんの村と交流がもちたかった。もう会えないかもしれない、というのには耐えられなかったから。またね、といって別れたかったから。

だから、僕たちは満場一致でホノちゃんを送ることにする。道中



の心配と心からの感謝と、それから少しの期待をこめて……。

もっともその前に、僕たちの気持ちをホノちゃんに伝えて、ホノちゃんがどうしたかを教えてもらおうという大仕事が残っているのだけれど。

## 十話 お話をしよう（後書き）

・このまちだいすき

たんけんぼくのまち、でも可。何を見ていたかでだいたい歳がばれる。

・猫さんズ

ミケ・クロ・ブチの三匹。主人公たち四人にはなついているものの、人間不信がなくなっただけではない（飼い主に捨てられたと思っ

## 十一話 はじめまして

サラサラと流れる澄んだ川は、少しずつ幅を広げていった。といつても、まだまだ溪流か清流といったたたずまいだ。さっきから赤とんぼや塩辛とんぼ、それにいろんな種類の糸とんぼが、顔の前を横切って挨拶をしては、またふつとどこかに飛んでいく。川幅が大きくなるにしたがつて、とんぼの数も増えているようだった。中には麦藁帽子の先にとまる可愛いやつもいる。

どうやら、無事に当たりをひいたらしい。

あちらこちらを確認しては笑顔でうなづくホノちゃんを見て、そう思った。僕たちには今までと同じ川原にしか見えないけども、ホノちゃんにとってここは見知った景色でなのだろう。少し上流の滝を越えてからこっち、僕たちの気づけない”何か”を見つけて、彼女はずっとニコニコしている。

探検の終わりは近い。

話は一日前にさかのぼる。

どうにかしてホノちゃんを村に届けられないか、という議題で僕たちは頭を突き合わせていた。何度か確認を取ったけども、ホノちゃんは村にどうやって帰ったらいいかわからないらしい。もつともこの辺は僕たちの解釈が正しければの話だが、どうやらキノコ採集にでたまま迷子になってしまったようなのだ。こうなると、いよいよ一人で帰すわけにいかなくなった。しかも、小さな弟か妹かを家に残してきているらしい。話してくれるまで気づけなかったけど、そのことがずいぶんと気にかかっているようだった。

それで、何か手がかりがないかと長いこと会議を続けた結果、ホノちゃんの村はどうやらかなり低い土地にあることが分かってきた。三方向を低い山に囲まれた盆地に近い場所にあるらしい。そのことと、公民館がどうやら山の中にありそうなこと（ぱつと見気づきにくいけども、川がある側の森は緩やかな下り坂に、反対側は緩やかな上り坂になっている）や、ホノちゃんが来た方向などを考え合わせた結果、いつも魚をとっているあの川は、ホノちゃんの村の湖（ホノちゃんの表現を見る限りかなりの広さがあるらしい）につづいているんじゃないだろうかという仮説ができた。もしそうなら、川を伝っていけば迷わず村周辺に着くことになる。

ただし、川ぞいを下っていったとして、もし見当違いの場所にながっていた場合、骨折り損のくたびれ儲けになることも考えないといけない。そして、ここ数ヶ月の半サバイバル生活は、“体力”というやつは良く考えて使わないといけないことを教えてくれた。なにしろ、重い風邪にかかったり、思わぬ怪我をただけで「家族」に迷惑をかけるし、へたをしたらそのままゲームオーバーになりかねないのだ。もつと気楽に考えたいけれど、今は自分の行動に慎重すぎるくらいでいたほうがいい。

高いところに登れば村が見えるんじゃないか、というアイディアが出たのは、そろそろ日が傾き始めるかも……というところだった。

よく考えてみれば、「宝島」でも「神秘の島」でも「ロビンソン漂流記」でも、高いところから周りを眺めて地形を把握するのは基本でないか！　そうして考えてみると、こちらに来てから数ヶ月間、今までそれを思いつかなかったのが不思議だった。善は急げとさっそく皆で裏山に入る。僕たちがえっちらおっちら山のとっぺんに着いたとき、稲じいちゃんはもう背の高い木の上だった。

「よお見えるばい。はよ登ってきい」（早く登ってきなさい）

稲じいちゃんがこちらに手招きをする。よほど集中しているのか、手招きをした腕以外は一切動かさず、ずっと遠くを睨みつけているようだった。

僕たちは顔を見合わせた。……これは、本当に期待できるかもしれない！

初めに枝をつかんだのは僕だった。そのすぐ後、さっちゃんに促されてホノちゃんが上手にあとを追いかけてくる。佐々木さんはしばらくの間、さっき登ってきた山道のほうを向いて立っていたけど、ホノちゃんが登りきってしばらくしてから樹上の人になった。道のほうに何か気になることがあったんだろうか。ちなみにさっちゃんは少し登った後、上さ行くんは無理ばい、と笑って、見守る役に徹している。腰に無理はさせられないから、残念だけど仕方がない。

ホノちゃんが座った横枝よりも少し上。稲じいちゃんのそばの大枝を抱えて、懸垂の要領で体を持ち上げる。びゅうつと強い風が吹いてバランスを崩しそうになったけど、腕と足に力を入れて、落ちないように体勢を整え、やり過ごした。風は僕たちの体と木の枝を揺らして、そのまま西日のさす空に吸い込まれていく。来たよ、と稲じいちゃんに声をかけてから、枝に座りなおすと　僕の目に飛び込んできたのは、ため息が出るほど素晴らしい大パノラマだった。

眼下にはテレビでしか見たことの無いような大森林が、見渡す限り広がっていた。遠くに目をやれば霞がかった濃緑色の山が連なっていて、まるで水墨画のようにたたずんでいる。森を分ける何本かの溪流が、絵にアクセントを持たせていた。本当に見事な景色だが、残念ながら、今注目すべきなのはそこではない。僕たちの視線はただ一点、稲じいちゃんと同じ場所に集まっていた。

ここから幾分か離れた場所から、細い煙が何条か立ち上っている。距離があるのと間の木が大きいので見えにくいけども、煙の出所は平たい広場のような場所だった。目を凝らせば森の切れ間から、建物らしき影を探すこともできる。その向こうには広々とした湖の水面が光を反射して、ときどきキラツと輝いていた。

「ホノちゃん、あれがホノちゃんの”ハル”？」

いつまでも呆けているわけにはいかない。念のため右下の枝に腰掛けるホノちゃんに確認してみると、多少自信はなさげだけでも、多分そう、といった具合に肯き<sup>うなず</sup>が帰ってきた。ちなみに、”ハル”というのは、ホノちゃんの言葉で（多分）「村」とか「里」に近い単語だ。もしかしたら「家」という意味かもしれない。例のおにぎり×5のような絵をさして、ホノちゃんが”ハル”と言うので、そういうことだと思って僕たちも使っているのだ。案外適当だけでも、

意見の食い違いは      少なくとも表面上は      おきていない。

改めて下を見てみると、先ほど予想したとおり公民館近くの川は  
”ハル”に向かつて伸びていた。右側に大きく曲がっていて、幾分か遠回りになりそうではあるけれど、川沿いに行つて、迷う心配はなさそうだ。

その後木を降りた僕たちは、さっちゃんに見えたものを報告して（木が邪魔なので下のほうではよく見えない）一度公民館に帰宅した。明日”ハル”に向かいたいことを、絵を使ってホノちゃんに説明する。紙の上では太陽が沈んで、月が出て、もう一度太陽が顔をのぞかせていた。

そして、冒頭に戻る。

ホノちゃんはプレゼントした麦藁帽子を飛ばされないように手で押さえながら、あっちに行つては帰つてきて、こっちに行つては帰つてきてを繰り返している。おとなしい子かと思つていたけど、昨日の木登りの様子といい、今日のこのはしやぎ様といい、なかなかどうしてお転婆な子だったようだ。やっぱり緊張していたんだろう。

「大丈夫？」      「転ばんようにね」      「気いつけなよ」

通じないと分かっているても声をかけてしまうのが親心……いや保護者心というものだと思う。本当を言えば、地元民のホノちゃんよ

りも僕らの足取りの方がよほど危なっかしいのだけれど、岩の上やら倒れた木の上やらによじ登るのを見るのはなかなか心臓に悪い。苔ですべらないかとヒヤヒヤするし、なによりホノちゃんは靴をはいていない。

そう、靴を履いていないのである。裸足なのである。

足の裏が頑丈なのか、特に怪我もなく森を抜け川原をずっと歩いてきたわけだけど、ふと足元が目に入るたびにどうしてもヤキモキしてしまう。公民館にいる間に余っている靴を勧めてみたりはしたんだけど、どうも足に合わなかったようで裸足のままなのだ。本人がいらないと言うから仕方ないのだけど……材料と時間に都合がついたら草鞋を編んで再挑戦してみようと思う。あれなら裸足に近い感覚で履けるはずだ。

そんな風に、はしゃぐホノちゃんを見ながら癒されたり、気を揉んだりしていると、ホノちゃんがあつと声をあげてこちらを見た。正確にはこちら側を向いたと言ったほうがいいかもしれない。その視線の先はどうやら僕らからは少しずれていて……つられて振り向くと、ポカンとした顔でホノちゃんを見つめる壮年の男性が、木の陰から顔を覗かせていた。



## 十一話 はじめまして（後書き）

・佐々木さんはしばらくさつき登ってきた道のほうを……

ホノちゃんは膝丈くらいのワンピースで、木登りをしています。  
お察してください。

特に意味はありませんが、下着が庶民に広がるのは江戸時代からだそうです。

## 十二話 はじめまして（前書き）

作中に出てくる言語は架空のものです。

## 十二話 はじめまして

つられて振り向くと、ポカンとした顔でホノちゃんを見つめる壮年の男性が、木の陰から顔を覗かせていた。

### 十二話 はじめまして

一瞬、辺りが静まりかえった。ツクツクボウシの鳴く声とサラサラという水音が、やけに大きく聞こえる。気温のわりに強い日差しが、ジリジリと肌を焼く音まで聞こえそうだった。

しかしそれも一瞬のこと、すぐに静寂は破られる。

「ホノ！」

それは、怒鳴り声でこそなかったけれど、おもわずびくつと体のはねるような大声だった。男の人は白の混じった髪を振り乱し、落ち葉を跳ね飛ばしながらホノちゃんに駆け寄って、体当たりでもするようにして抱きしめる。

「ホノっ　　しいホノ！」

何度もホノちゃんの名前を呼ぶその声は、だんだんと鼻声になっていくのが分かった。その、遠目でも分かるほど大きな隈をつくった目元が、涙に濡れているだろうことは、背中越しからでも想像に難くない。ホノちゃんが何か言っているけども、抱きしめられてくぐもった声を、ここから聞き取ることはできなかった。

二人はしばらくの間、抱き合っていた。多分、男性は村の人で、いなくなったホノちゃんを探していたのだろう。もしかしたら家族の方なのかもしれない。人の機敏をみるのが上手な方だとは思わなけれど、二人の再会を邪魔するほど”空気が読めない”わけではないつもりだった。

どれほどそうしていただろう。ホノちゃんがそつと腕の中から抜け出して、男性に耳打ちをした。こうしてホノちゃんと並んでみると、意外と背が低い人だ。ホノちゃんもこまい（小さい）けれど、この人も僕　残念ながら日本人の平均身長にとどかない　より少し目線が低い。160cm　弱くらいではないだろうか。とはいえ見た目だとそんなに小さい感じがしないのは、この人の纏う空気のせいかもしれない。背は確かに低いけど、いかにも骨太で丈夫そうな体や顔の下半分を隠す髭、それに力強く輝いた目が、迫力というか、貫禄というか、そういった”でっかい”オーラをかもしれない出しているのだ。

そんな”でっかい”おじさんは、ホノちゃんの耳打ちをうけて僕らのほうを振り向いた。僕がとりあえず会釈をすると、同じように頭を下げてから、ホノちゃんを連れてゆっくり歩いてくる。おじさんと目が合った。一歩いっぽ川原を踏みしめてこちらに歩いてくるおじさんは、真剣そのもので正直ちよつと怖い。お辞儀を返してくれまし怒っているわけではないと思いたいけれど……。

おじさんの目力に負けそうになったころ、僕たちの前で突然、おじさんが消えた。もちろん本当に消えたわけではなくて、視界を動かせば、おじさんは川原にしゃがんでいた。いや、ひざまづいていたという方が正しいかもしれない。それは正座から片膝を立てて頭をたれた、時代劇の武士や騎士によく似合いそうな格好で。

「”ありがとう”」

急展開に目を白黒させる僕たちに、耳慣れた言葉が聞こえた。え？とおじさんを見やる。おじさんは”ありがとう”とかすれた声で繰り返した。その後ろからホノちゃんが”ありがとう”と言っておじさんと同じように膝をつく。そんな言葉、いつのまに覚えたのだろう。

「ありがとう」

この格好はホノちゃんたちにとって感謝を示す姿勢なのかもしれない。見よう見まねで同じ目線までしゃがみこんで、さっちゃんが、稲じいちゃんが、佐々木さんが、そして僕もそう口にする。ありがとう、ありがとう。さっき静かだった川原はしばし、お互いの”ありがとう”で賑やかになった。

まったく、不意打ちでなんて、反則だ。泣いちゃいそうじゃないか。

その後それなりに緊張がほぐれてから、ホノちゃんを通訳、と言っているのか分からないけれど間において、おじさんと簡単な自己紹介をした。今はおじさん……改め『アヤ』の”ニタばん”（以下ニタさん）につれられて、森の中の獣道のようなところを歩いていくところだ。『アヤ』がどういう意味かは結局わからなかったけど、ニタさんは、なにかの役職についているのかもしれない……。本人が望んでいるからいいんだろうけど、父親くらいの年齢の初対面の人を”ニタばん”と呼ぶのは、あだ名で呼んでいるようで複雑だ。たぶん”ニタさん”というような意味だろうから、失礼ではないんだらうけど、思わぬところで言葉の壁に当たってしまった。

僕たちの前を歩くニタさんは、さつきは背中に回していた編み笠のようなものをかぶって、腰にさしていた石の手斧を抜き放っている。石斧せきづなんて、教科書の中と博物館でしか見たことがなかったし、野蛮なイメージがあったけど、ニタさんが時々藪や蔦をはらうのに使うそれは、石でできていることを忘れるくらいこの場になじんでいた。ごく普通の手斧か鉞だといわれても、多分すぐには気づけないと思う。”違和感のなさ”が逆に不自然に見えて、それが無性におかしかった。

結局、森を抜けるまで僕たちとニタさんはあんまり話をしなかった。一言二言話そうと思っても、お互い言葉が通じないから苦笑いで終わってしまい長く続かない。ただ、道中木が倒れていたり、木の根が飛び出ていたりして通りにくいところでは、ホノちゃんが、”だいじょぶ？”と声をかけてくれ、それに、”ありがとう”だとか、”大丈夫”だとか、返事をする場面は何度があった。”だいじょぶ”じゃなくて”だいじょーぶ”だよ、なんて無粋な指摘はない。ここにいるのは、多少発音が違ったところで可愛いなあとし

か思わないし、心配してもらった事実だけで無駄に張り切ってしまうような、駄目な大人たちばかりなのだ。

どこまでも続くように思えた森は、しかし唐突に終わりを告げた。

先導するニタさんが一度こちらに体ごと振り向いてから、森の外に出る。僕たちもそれに続いた。

バタバタと音を立ててスズメの群れが舞い上がり、少し離れたところにまた舞い降りる。森から出てまず目に飛び込んできたのは、金色に光る稲穂の群れだった。日本のお米ではないのか、背がひょろつと高くて、株もあまり分かれていない。田んぼは土地を耕して作ったというより、もともと湿地だった場所を盛り土で区切って、そこに稲を植えたようだった。右の奥に見える湖から水がしみてくるんだろう。

そして、ニタさんが指をさしたその先。ここから田んぼの間を抜けてそう離れていない場所に、もう目的地は見えていた。周りより少しだけ高い場所ががならされていて、藁葺き屋根の枯れ草色が見えていた。

赤とんぼの群れをかき分けて集落に近づくにつれ、集落のこちら側の端にいくつかの人影が現れた。時間が経つにしたがつて、その数はだんだんと増えていく。中にはこちらに何かを叫ぶ人もいて、そんな中、ニタさんが声を張り上げた。

「ホノばたあんば！」

騒ぎに気づいたのか、集落の奥のほうから、家の中から、あれよあれよという間に人が集まってくる。集落の周りを囲っている背の低い柵から身を乗り出すようにして、こちらを見ているのが分かった。

「ホノばたあんば！」

ニタさんが腕を振り上げてもう一度叫ぶ。そして、両手をホノちゃんの脇にいれ、後ろからひよいと抱え上げた。びっくりするまもなく、集落からわあっと歓声が起こり、そのうち何人かは坂をこちらに駆け下りてくる。他の人たちも柵を乗り越え、小走りでこちらに来るのが見えた。全部で中学校の一学年分くらいの人数にはなるんじゃないだろうか。

愛されてるなあ。

高いたかいから開放されたと思ったら、先頭を走ってきた女の子に抱きつかれ、後から後からやってくる人たちにもみくちゃにされるホノちゃんを見て、そう思った。



## 十二話 はじめまして（後書き）

今回すごい難産でした……。うまくまとまらない的な意味で。ここがおかしいとかあれば、指摘してもらえると助かります。（今回に限った話ではないですが）

ああ文才が欲しい……。

## 十三話　ありがとう

楽しかことはね、足元さ転がつとーとよ。

ひーちゃんは、そいば見つけるんが、ちかつぱ上手か。

よう覚えといて、そのまま目のよか大人になりんしゃい。

小さいころ、瓜生<sup>うりせい</sup>のおばちゃんうの膝は僕の特等席だった。

思い返せば昔の遊びに始まり、ご飯の作り方から子供なりの人生相談まで、おばちゃんうは両親以外で最初の、そしてとても尊敬できる先生だった。もともと小学校で教鞭をとって一本芯の通った人だったから、厳しいことを言われたこともあったと思う。それでも、いやそんなところも含めて、僕はおばちゃんうが大好きだった。両親などなど周りの話を聞くに、一時期は金魚の糞のようにしてついて回っていたらしい。

おばちゃんうは僕が小学校に上がったころに亡くなって、もう会うことはできないけれど。おばちゃんうといっしょにいられた時間は、間違いなく「僕」の中に流れ、「僕」を形づくっている。無意識に三角食べをしていることに気がついた時なんかは、それを思っ  
てニヤニヤするのだ。

## 十二話　ありがとう

はい、とお酒のおかわりが注がれる。さっきからずっとかいがいしく世話をしてくれるおばさんに、ありがとうございます、とお礼を言っ、お茶碗のような杯を一口傾けた。お酒といいつつふやけたお粥のようなそれは、おおよそ飲み物とは言えない「食感」をのこしつつも、優しい甘さになってとけていく。面白いことにこの器こちらの言葉でも「サカツキ」と呼ぶらしい。他の単語は通じないというのに、こんなところで通じ合えるとは、言葉というのは不思議なものだ。

気がつけば、ホノちゃんの村にやってきて半日近くがたち、ギラギラしていた太陽もようやくおとなしくなってきた。僕たちは村の人たちに囲まれて、集落の中の広場で、ちよつとした宴会に参加している最中だ。地べたにござを敷いてわいわいとお酒を飲むのは、どこことなく花見の席のようにも見える。いや、時期的には紅葉狩りだろうか。

事ここにいたるまでのことは、話せば長くなるのだが……正直なところあまり記憶がさだかでない。はじめに、ホノちゃんにたかっていた人たちがあたらしいターゲット（ぼくたち）に気がついた。たぶんホノちゃんが何かを言ったのだと思う。その後の展開は想像

通り、ホノちゃんと同じく歓迎の洗礼をうけて、おしくら饅頭状態だ。しかもそのまま集落の中につれてこられて、あっちこちに案内された……と思う。ここにくるまでいろいろと想像を膨らませてきたのに、いざ案内されてみれば、久しぶりに感じる人ごみの熱気に圧倒されて、ふわふわしているうちに時間が経ってしまったのが残念だ。気がつけばこうして広場のござに座っていた。

そんな中はつきり分かったことといえば、この人たちが素朴で陽気で、ついでおひとよしということくらいだろうか。僕たちの周囲はしばらく満員電車のような人口密度になっていたけど、そんな中で移動しても誰も怪我をしなかったし、背が低くて中が見えないからか肩車をしてもらっている人もちらほらいて、なにより皆が笑顔だった。そろって背が低くて頭と目が大きい彼らは、にかつと笑うと独特の愛嬌がある。僕はその笑顔がいつべんに好きになっちゃった。

さて、この騒ぎの中ホノちゃんはどうしているかというと、じつはこれがなかなか大変そうだ。家族や旦那さんと談笑してはいるものの、かわるがわる村の人が来ては、背中を叩いたり頭をなでたりして絡んでいる。勝手な想像だけど、この集まりがホノちゃんの帰りをお祝いする会なのだとしたら、無事に主役を果たしているといつたところだろうか。

……ところで、さらっとながしてしまっただが、ホノちゃんの「旦那さん」についても語っておかなければならないだろう。彼は、僕たちが広場につれてこられたところに、（おそらく）集落の外から走

りこんできた。かと思うとホノちゃんに抱きつき、勢い余って押し倒すという衝撃的な登場をした人物だ。カジくんというらしい。

年のころはホノちゃんと同じ、それとも少し高いくらいだろうか。まわりの大人たちに遜色ないがっしりした体と顔つきで、しっかりした若者といった風情の少年だ。とはいえ、初めのうちホノちゃんとカジくんの関係は、お互いの外見年齢もあって、仲のいい兄妹だとばかり思っていた。ところがしばらく一緒にいる間に、いつの間にか腕に抱いた赤ちゃん　ヌイちゃんというらしい　の世話を2人でし、どころかホノちゃんがおっぱいをあげているとなると、そうも言っていられない。ちなみに、当のヌイちゃんは、今はホノちゃんの膝の上でお休みしている。

なるほど公民館にいた間、小さな弟か妹をえらく心配している、と思っただらこの子のことだったらしい。しかし、よくて中学生、へたをしたら背の高い小学生にも見えるホノちゃんが、普通に既婚者で一児の母というのは、なんというか、どうなんだろう。もっとも、そんなことは関係なく本人たちは心から幸せそうで、だからこれはたぶん、日本の文化圏で生まれ育ったゆえの違和感なんだろう。カルチャーショックというやつなのかもしれない。実際ホノちゃんのほかに、同じくらいの年齢で赤ちゃんを抱っこしている女の子を何人かみかけた。ここではそれが普通なんだろう。

ついでながら、さつき抱かせてもらったホノちゃんの子供は、それはそれは可愛かった。まだまだ人見知りをしない時期なのか、ほっぺたをつついて、ちいさな手と握手をしても、ふにやっと笑ってくれる。それを見ているホノちゃんは凄くやさしい目をしていて、幼いながら確かに「お母さん」な表情だった。この子がホノちゃんの子供だと確信を持てたのはそのときだったと思う。

ふと気づけば、空はずいぶんと色を濃くしていた。気の早いコウモリが一生懸命羽ばたくのを見ながら、もう一口お酒を含む。

ここは空が広くて綺麗だ。どうやってか意気投合したらしく、知らないおじさんとお酒をあおっている稲じいちゃんから目線を上げれば、丸く縁取られた天蓋が広がっている。ぐるりと囲む山際はほほを染めて、天頂の藍色から薄い茜色へ、見事なグラデーションがかかっていた。

「おつかれさーん」

両手にお土産を抱えて帰ってきたさっちゃんに声をかける。

「はい、ただいまさん」

荷物をいったん置いて、さっちゃんが隣に腰を下ろした。どうやら、僕たちの代表はさっちゃんだと思われるようで、それはおおむね正解なわけだが、ホノちゃんと同じく挨拶攻撃にさらされていたのだ。お土産はそのときに手渡されたいらしい。

「騒がしかねえ」

さっちゃんが目を細めてそう言った。視線を追って、僕も周りを見渡してみる。

「ほんに騒がしか」

本来ならあんまりいい意味の言葉じゃないかもしれない。それでもこの瞬間、僕たちにとって、”騒がしい”は最高の褒め言葉だった。

「ただばん”起きんねー?”」

せつかくの大騒ぎを寝過ごしてしまっている佐々木さんの腕をぺちぺちやって、起こす努力をしてみるものの、反応する気配すらない。もう何度もそうしたとおり、僕はため息をついた。空気に流されたのか、飲みなれないお酒を立てつづけに二杯やってから、ずっとこの調子で熟睡しているのだ。普段から、おれは下戸だから……、とアルコールを口にしない人だったけど、まさかここまでとは思っていなかった。このお酒、度数はかなり低い気がするのだけ。

逆に、挨拶に来た人たちが何度もお酌をされているくせに、顔色一つ変わっていないさっちゃんのうわばみ具合は、通常営業だ。並み居る男共を飲み比べでのした、なんて昔の武勇伝を聞いたことがあるけれど、実際さっちゃんがへべれけになったところを見たことは一度もない。この程度じゃ「飲んだ」内にはいらないうか。

「お団子もらったばって、つつかんね」

さっちゃんに言われて食べたお団子は、ちょっと渋くて硬かったけど、素朴で優しい味がした。

そうこうするうちに時間は過ぎてゆき、誰かが歌を歌い始めたのをきっかけに、焚き火を囲んだ踊りが始まった。初め三人で始まったその輪には、一人、また一人と人が増えていく。

もう離さないばかりにヌイちゃんを片手で抱きしめたホノちゃんが、踊りの中に飛び込んだのと、僕たちが輪の一員になったのは、くしくもほとんど同じタイミングだった。

やんややんやと踊り明かしていくうちに、日はとつぷり暮れていく。フィロロロと虫の音を聞きながら、パチパチ爆ぜる焚き火の音をBGMに、誰かの歌う知らない音楽に合わせて、昼間の疲れを忘れたように、僕たちは踊って踊って踊った。言葉は通じなくても人のぬくもりが伝わってくる、この笑顔が素敵な人たちと踊れる幸せを噛みしめながら。

さて、明日は筋肉痛だ。



### 十三話 ありがとう（後書き）

ホノちゃん

主人公たちが最初に出会った現地の人。ちんまいけど、華奢ではない。小学生にも見える幼顔だが、頭も切れるし結構肝も据わっている。現代日本にいれば結婚できる年齢ではない。

カジくん

ホノちゃんの旦那さん。イメージはドカベンを少しほっそりさせた感じ。ホノちゃんと同じく日本で結婚できる年齢ではないが、歳相応以上にしっかり者。登場時に取り乱していたのは、生存が絶望的だったホノちゃんに再会できたからで、本来はとても穏やかな性格

ヌイちゃん

上2人の間にできた男の子。とても可愛い。

この3人を含め現地の人たちは基本的に、アイヌ人・琉球人・ポリネシア人＋江戸の人々をモデルにしています。

## 十四話 秋深く……

夜ふと目が覚めると、遠くで、それとも驚くほど近くで、遠吠えが聞こえることがある。

初めのころは訳もなく動揺したものだけど、今ではその声も頼もしく感じるのだから不思議なものだ。なれてしまっただけじゃない。「彼」が近くにいるとわかるとなんだか見守られている気がして、微笑ましい気持ちと同時に安心感が湧いてくるのだ。

力は強いくせに、妙に恥ずかしがりやで、なかなか姿を見せてくれない「彼」。僕たちは勝手に「タロ（太郎）」と呼んでいる。昔博多のおじさんが飼っていた秋田犬くらいの大きさで、この辺の山犬を何匹も従えている立派なポス犬だ。日本犬と違ってしっぽがまっすぐ垂れていて、足が長く目つきが鋭く、たてがみのように見える首筋の長い毛にすらっとした鼻立ちの精悍な顔をしている。

急に襲われるんじゃないか、うちの子たち（アイガモとか）を食べられるんじゃないかと心配したのも今は昔。

森にいた間はこっそり後ろから見守ってくれたり、お礼に時々食事をおすそ分けしたり、そんな間柄の頼れる隣人だ。

十四話 秋深く……

宴が明けて次の日。なれない場所で寝たせいか、日が昇るころにはもう目が冴えていた。しかし、布団無しで眠れる季節もそろそろ終わりかもしれないな……なんてことを思う。

ぐつとのびをして、早朝の冷たい空気を思いきり吸い込んだ。

ふと周りを見回せば、すでに鍋の下では火がたかれて煙をあげ、集落は活動を開始していた。まだ東の空が白み始めたばかりだというのに、なんともタフな人たちだ。

「おはようござい……ふああ……ます」

タイミングの悪いあくびをかみ殺しつつ、挨拶をする。さっちゃん佐々木さんは、僕が起きたときにはもう隣に座っていた。稲じいちゃんだけは、昨日人より遅くまで起きていたせいか、いまだに夢の中だ。

「おはよう」

「おはようさん」

みんな元気よか（元気がいい）ねえ、なんて話しながら、僕もさっちゃんの隣に腰を下ろした。

実際、祭りの後の寂しさなど感じていないかのように、一様に里

の人たちはテンションが高い。体を温めているのかぴよこぴよこ飛び跳ねているおいさん（おじさん）とか、肩をぐるんぐるんまわして何かのやる気に満ち溢れているようなお姉ちゃんとか。

実は前日のお祭りは、本格的な収穫の前に最初の稲穂を捧げる感謝祭のようなもので、本番（稲刈り）は終わっていないのだ、ということ。ちょうどその準備をしている間にホノちゃんが行方不明になって、ホノちゃんを探し回っていた結果、祭りを延期することになり、収穫期に食い込んでしまったのだということ。かと思えば、本人はふらっと帰ってきて、しかも神様（後になってこそ笑い話にもなるけれど、僕たちのことを本当にそう思っていたらしい）をつれてきたので、例年以上のお祭り騒ぎになったのだ、ということを知るのもう少し先になってからの話だ。このときの僕たちは、何が始まるんだろう……とハテナマークを浮かべるばかりなのだった。

さて、遅れてもぞもぞ起きだしてきた稲じいちゃんを輪に入れて、村長直々に振舞ってもらった朝ごはんの里芋とお団子を食べつつ、首をかしげていた。

ちなみにこの「村長」、本当に村長なのかはわからない。ただ、変な格好をしているのでもなく、いつも穏やかに笑っているだけなのに、思わず目を向けてしまうような、不思議な存在感をもったお人だ。里の人たちにも敬われているようで、実際、周りの人に指示を出しているのを何度も見かけた。それで、僕の中で勝手に「村長」と呼んでいる。村の人からは奥さん。昨日いろいろと世話を焼いてくれたおばさんは、この人の奥さんのようだった。ともども「ふいみ」、に近い呼び方をされているんだけど、これがどうも、日本人の舌では発音しづらいのだ。

話は戻って、村長からもらった朝食を、ありがたくいただいていたとき。トコトコと、ホノちゃんが腕に赤ちゃんを装備して現れた。昨日から、もう又伊ちゃんを手放さないと決めたようで、何をするにしてもこの格好だ。

「はあよう」

またまたいつの間に覚えたのか、出会い頭にジャブをもらった。本当にこの子の記憶力はどうなっているんだろうか。

「おはよう」

「ホノばん、おはよう」

「おう、おはよう」

佐々木さんは、「ん」と頷いただけだったが、よく見ればいつもより二割り増しくらいにイイ顔をしている。

そんな僕たちをしり目に、ホノちゃんは又伊ちゃんを落とさないように抱えなおして、村長と一言二言話した後、反対の手でさっちゃんの袖をひっぱった。にこにこして、なんね？ と問いかけるさっちゃんに、言葉を選んでいるのか”あー”とか、”んー”とか悩んでいる。

はっと名案を思いついたという顔で手を離れたホノちゃんは、又伊ちゃんを抱いたまま、器用に腰をひねって「いつい にい さんしー」と声を出した。それからさっちゃんを指し、広場を指し、むにゃむにゃと何かを言っている。

残念ながら、すぐには意味が分からなかったので、その後ホノちゃんの説明……ボディランゲージはしばらく続くことになった。

さて、身振り手振りという名の異文化交流に決着がつき、ついでに朝ごはんもきれいに食べ終わり、ホノちゃんと村長に背中を文字通り押された結果、僕たちは広場の端っこ近くに並んで、正面から視線の集中砲火を浴びることになった。こちらに向き合うように、学校の三・四クラス分くらいの人たちが、思い思いに間を空けて立っていて、僕たちはその前でお手本のポーズを取る。

つまるところ、皆の前でラジオ体操の実演をやっているわけだ。

いっち にい さん しい

ごお ろつく しち はち

にい にい さん しい……

掛け声と共にお手本として腕を振り、足を曲げ、それとも背中をそらせば、ばらばらと同じような格好が量産される。子供のころの運動会や、夏休みの朝を彷彿させる時間はしばらくの間続いた。

この村は、うち（公民館）からそう離れていないわけだし、まだ日本に帰れる見込みがない以上、これからお世話になることもあると思う。指導をお願いされたのは予想外だったけど、ラジオ体操は本気でやれば病気になりにくくなると聞いたことがあったから、し

すっかり覚えてもらえればお礼の一つにもなるかな？ と話したものだっただ。

さて、体操も終わり、一息ついて、ホノちゃんを筆頭とした何人かに「ありがとう」と言われたり、おそらくこちらの言葉でお礼を言われたりしていた最中のこと。お辞儀合戦をさえぎるように、村長が腹の底から出したような、低くて穏やかで、しかも大きな声で注意を引いた。急にしん……と静まりかえった広場の視線が一点に集中する。もちろん僕たちも何事かとそちらに目を向けた。村長は多少音量を下げた、それでもよく通る声で何か短く演説のようなことをしたのだと思う。残念ながら意味を把握することはできなかったけど、決して悪い内容ではなかったんだろう。村長の最後の言葉が終わると同時に、周りから歓声が湧きおこった。

皆が籠やら壺やらを持ってきて、中には腕を振り上げて喜んでい  
る人もいる。村のワンちゃん どころなく公民館の近くを縄張り  
にしている野良犬たちに似ている も興奮したようにほえていて  
なんだろう、これから公民館に帰りたいですとは言出しにくい雰  
囲気だ。

はたして村長の号令一下、準備運動を終わらせ気を高まらせた一  
団は、わあっと関とぎの声も高らかに走り出し、一人くらいヒヤッハ  
ーとでも叫びだしそうな雰囲気で、あるいは壁を乗り越え、あるいは  
門をくぐり抜けて田んぼに突進していった。わっさわっさと飛んで  
いたとんぼの群れが、大きな音と迫る人の壁に驚いてぱっと散り、  
そしてじわじわと元の位置に戻っていく。田んぼの中から10羽、  
20羽ではきかないスズメの群れが飛び出して、背の高い草の陰か  
ら雉らしき鳥が一目散に逃げていく。

そしてかれらを驚かせた一団の中には、状況がよくわからないま

まに純日本産のことなかれ主義を全力展開した、4人の外の人  
言うまでもなく僕たち　　がまぎれこんでいて。

僕たちが無事に根城まで帰還するのは、稲の収穫を全部手伝って、  
”本当の”収穫祭で年甲斐もなくはしゃぎ明かした後……十月も半  
ばに差し掛かってからのことだった。もともと、それまでの間、猫  
のえさやりや、最低限の畑の世話、自分たちの田んぼの様子見なん  
かでちよくちよく帰ってはいただけだ。基本的に引き止めてくれ  
る村の人の好意に甘えてしまったのと、実際収穫期には人手があれ  
ばあるだけありがたいのを知っていたから、村長の家に泊めてもら  
ったりして、気がつけばずいぶんとたってしまっていた。本物の豎  
穴式住居に筵むしろをしいて寝るなんて、なかなかできない経験だったと  
思う。面白いことに、土の床はほんのり温かった。

とはいえ、お米の収穫にどうして一ヶ月も、と思うかもしれない。  
けれども、そんなに時間がかかった理由は、別に怠けて収穫してい  
たからでも、道具がまずくて作業がはかどらなかったからでもない。  
確かに、道具といえは教科書でしか見たことのなかった石包丁（！）  
だったから、初め内は山（公民館）から鎌を持って来た方がいいか  
と思ったものだ。ところが、予備のものを貸してもらって実際に使  
ってみれば、これが思いのほかスムーズに収穫できた。だから、遅  
くなったのはそういうことじゃないのだ。

問題はむしろ田んぼのほうだった。稲穂の間にたくさん生えてい  
る雑草をよけて摘むのが大変だったし、そもそも株によつて熟成度  
合いがまちまちで、摘む前に実の詰まった穂を捜さないといけない  
のだ。そうして、毎日少しずつ収穫していつて、全部の田んぼ、株  
を制圧したころには一ヶ月がたっていた。日本にいてはまず味わえ



ない、信じられないくらいおらかな稲作だった。

さて、少し休んだら、今度はこちらも頑張らないといけない。川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>をさかのぼり、森をかき分けて、ようやく揃って帰ってきた僕らの巢は、黄金色に色づいていて。ここ一月で見慣れてしまったそれよりは少し大きい稲の穂が、頭をたれて待っていた。

十四話 秋深く……（後書き）

遅くなつて本当にすみません。本来の仕事が忙しい時期なのに加えて、新しくパートの仕事も始めたもので、これからのはかたつむり更新になると思います。この程度の文章しか書けませんが、これからも宜しくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8581u/>

---

日本 はじめました（改訂版）

2011年12月17日23時48分発行